

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

アイルランド、ジャガイモ大飢饉研究

メタデータ	言語: ja
	出版者: 日本赤十字九州国際看護大学
	公開日: 2013-01-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 徳永, 哲
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15019/00000102

著作権は本学に帰属する。

アイルランド、ジャガイモ大飢饉研究

Study on the Potato Famine(1845-9) in Ireland

徳 永 哲

Satoshi Tokunaga

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

ABSTRACT

The Potato Famine took place between 1845 and 1849. The terrible potato disease, the 'Blight', came from England to Ireland in the autumn of 1845. The potato was damaged as badly in Britain as in Ireland that autumn, but there was no famine in Britain. 'Blight' caused a terrible disaster just in Ireland. The millions of landless and destitute people poor had few or no money and they could not have any other crop except the potato. More than a million people died, and about a million people left Ireland for foreign countries for the period of five years.

I wrote a paper, Relief Measures and Epidemics in the Irish Great Famine (1845-49), in 2002, and presented it to the Intramural Research Report Vol. I. When I was writing the paper, I found a lot of problems which were beyond my understanding. Why were the poor people not relieved? Why could they eat any food except the potato? Weren't there any relief activities? A lot of problems welled up in my heart. I traveled around Ireland in 2004 to solve the problems.

I went to Connemara District by bus, and looked at the beautiful mountains and lakes. I was very much fascinated by them, but at the same time I felt sad. I imagined that the poor Irish people evicted from the landlord were wandering on the rocky mountains, and starved to death. The beautiful mountains I saw must have seemed to the poor Irish people to be the desperate ground.

I want to make it clear in this paper how Irish people lived and died in workhouses, fever hospitals and their cottages, and what kind of disease they died of.

A TABLE OF CONTENTS

Chapter 1. Ireland before the Potato Famine

- (1) Changes of the Population in Ireland 1800-1871
- (2) High Death Rates and High Population Densities
- (3) Problems of Land Systems
- (4) Spread of the Potato and the Starvation Season

Chapter 2. The Potato Famine and Salvation

- (1) Infection of 'Blight' in 1845

- (2) Establishment of 'Relief Commission'
- (3) 'Blight' reappears in 1846
- (4) The Condition of Public Works Employment in 1846
- (5) Failure of the Relief Scheme on Public Works Employment

Chapter 3. The Real Condition of Starvation Deaths

- (1) 'Eviction' and a Cold Wave
- (2) Out-door Relief Works
- (3) The Real Condition of 'Workhouse' in 1847
- (4) Spread of Diseases
 - (a) Smallpox
 - (b) Starvation Fever
 - (c) Typhus
 - (d) Relapsing Fever
 - (e) Scurvy
 - (f) Dysentery
 - (g) Cholera

はじめに

2003年、本論集 IRR に『アイルランド大飢饉 (1845 - 48年) の救済策と疫病』を発表した。その当時、まだアイルランドのジャガイモ飢饉に関する資料が十分ではなく、しかも、読んだ資料の中に書かれてある地名すらアイルランドのどこなのか皆目見当がつかない始末であった。アイルランド島は北海道ほどの面積だが、地形や生活習慣が地方によって非常に異なっている。地名からその場所と生活環境がイメージできないで、こうした資料を読んでも、理解の範囲は限定され、具体性、現実性の乏しいものになっていた。

一般的にはアイルランドのジャガイモ飢饉というと、大勢の餓死者が出て、多くの海外移民を生み出し、特にアメリカの新生に大きな貢献をしたと言われている。それは明らかな事実であるが、問題なのは、ジャガイモが腐っただけで、あのイギリス帝国と連合国であったアイルランドに、何故、推定100万人以上もの餓死者が出て、100万人近い住民が土地を捨て、海外へ逃れなければならなかったか、ということなのである。

これは不思議なことでもあり、謎めいた事に思えた。19世紀半ばとはいえ、産業革命は達せられ、ブリテン島には産業都市が発達し、科学的な経済政策を基にして、社会制度、福祉制度、医療制度が整えられつつあった。世紀後半に入るとロンドンで万国博覧会が開催されている。アイルランドはその大国と連合している国である。たとえ農業国であっても、餓死者や移民の総数が200万人を越えたというのは、とても理解できるものではないし、単純に歴史的な一大事件として知識の範囲にとどめるということではできなかった。

幸いなことに、大学から奨励金を出してくださるというので、2004年9月にジャガイモ飢饉の被害の大きかった地域を訪ね、飢饉に関する資料収集旅行を行うことができた。アイルランド中部のロスコモン州からゴールウェイ州、コンネマール地方からケリー州を経てコーク州へ路線バスの旅であったが、バスの窓から風景を眺めながらジャガイモ飢饉の感慨に耽ることが出来た。

この度ここに上梓した『アイルランド、ジャガイモ大飢饉研究』は、『アイルランド大飢饉 (1845 - 48年) の救済策と疫病』を基にして、その資料収集旅行で集めてきて資料から再構成、書き加えてまとめたものである。しかし、まだ完全には全資料を読み切れていないため、テーマは貧民救済施設の実態と病気に限られたことをここにお断りさせていただく。

本 論

本 論 目 次

第1章 ジャガイモ大飢饉が起こる前のアイルランド

- (1) アイルランド(1800-1871年)の人口の変化
- (2) 高い死亡率と医療問題
- (3) 土地制度の問題
- (4) ジャガイモの普及と飢饉の季節

第2章 ジャガイモ大飢饉と救済

- (1) 1845年、「胴枯病」の感染
- (2) 救済委員会の設立
- (3) 1846年、「胴枯病」再発生
- (4) 1846年、公共事業雇用状況
- (5) 公共事業雇用救済策の失敗

第3章 餓死の実態

- (1) 「追い立て」と大寒波
- (2) 戸外救済活動
- (3) 1847年、貧民救済施設の実態
- (4) 病気の蔓延
 - (a) 天然痘
 - (b) 飢饉熱
 - (c) 発疹チフス
 - (d) 回帰熱
 - (e) 壊血病
 - (f) 赤痢
 - (g) コレラ

第1章 ジャガイモ大飢饉が起こる前のアイルランド

(1) アイルランド(1800-1871年)の人口の変化

(1800-71年)アイルランドの人口	
1800年	約450万人
1821年	約650万人
1841年	8,175,000人
1851年	6,552,000人
1861年	5,799,000人
1871年	4,412,000人

左の表は1800年から1871年までのアイルランド人口を示している。^(註1) 1800年と1821年の人口は大雑把な数字であるが、当時はまだ国勢調査が実施されておらず、推測である。

1815年にナポレオン戦争が終結し、イギリスは帰還兵と不況と穀物の不作が重なって失業者がふえ、都市部は混乱をきたしていた。アイルランドにも数千人に及ぶ兵士が戻ってきた。アイルランドも人口が上

昇し、産業は衰退していた。ダブリンには失業者があふれて、貧困と飢饉と犯罪が増えていた。

また、政治的には1800年に、イギリスによって一方的に「合同法」(the Union Act)が制定された。アイルランドは「連合王国」^(註2)としてイギリスに統一された。その正式な国名は「イギリス・アイルランド連合王国」(the United Kingdom of Britain and

Ireland)であった。議会はロンドンで開かれたので、イギリスの政策が優先され、アイルランドはイギリス帝国の維持に利用されたに過ぎなかった。

イギリス国内の産業の近代化がすすんでいたのに対してアイルランドでは前近代的なままであったため、倒産が相次ぎ、労働者は失職した。そうした労働者はイギリスに渡って低賃金労務者として働いた。イギリスでは社会主義が入ってきており、すでに組合ができ、労使対立の時代を迎えていた。そうした状況にあっても、アイルランドは低賃金でも喜んで働く労務者を送り出し続けた。

また、イギリス国内には産業都市が各地にできて、農産物の価格が上がった。アイルランドは農産物を安く提供し、物価を抑えるのに貢献した。このように、アイルランドは結局、イギリスの支配下に置かれ、巧みに利用されたに過ぎなかったのである。

ナポレオン戦争の間、イギリスは穀物が不足し、穀物の価格は上がった。イギリスは価格の上昇を抑えるためにアイルランドから作物を安く仕入れた。この時はアイルランドの作物は需要が高まり、農業は活気づいた。しかし、実際に利益をあげたのは、地主だけであった。アイルランドはほとんどが借地農民で、生活は逆に悪化していた。自分の利益ばかりを考えた地主は、湖沼や山岳地帯を開墾し、農耕地を拡大した。

しかし、アイルランド西部、南西部の新しい土地は痩せていた。それで、そのままでは穀物を栽培することはできなかった。地主は痩せた土地に小作人を住ませ、ジャガイモを栽培させた。都市で失職した貧しい労働者や土地を求める若者たちが農耕をするためにやって来た。彼らは土地に不釣り合いな地代を払ってでも喜んで借りた。彼らは地主から直接借りる場合もあったが、ほとんどが広い土地を借り受けている借地農民から狭い1区画の土地を又借りしたのである。

ナポレオン戦争が終結すると、今度は、穀物が余り始めた。穀物の価格は下がった。地主の利益をまもるために、イギリス議会は1815年に穀物の輸入を制限し、価格を戦争時と同じ水準に保てるように「穀物法」(Corn Law)を制定した。この「穀物法」はイギリスでは地主優遇政策として労働者や中産階級の批判を浴びた。さらにその批判は、1830年代にイギリス国内の穀物不作が続く、穀物の価格が急騰したため、「穀物法」撤廃運動へと展開された。しかし、「穀物法」撤廃はイギリスの台所を担うアイルランドにとっては逆風であった。他国からの輸入を制限する「穀物法」のおかげで、アイルランドはジャガイモをはじめ、小麦、オート麦などを生産し、独占的にイギリスへ移出できた。アイルランドは産業革命によって発展するイギリスの産業を台所で支えたのである。しかし、小作農民には直接現金収入の向上に結びつかなかった。彼らは豚や鶏などの家畜を飼って育て、市場に出すことが出来た。ジャガイモやそれ以外の作物も市場に出し、地代を稼ぐことができたが、現金収入を増やすことはできないで、貧しいままであった。こうした状況の中でアイルランドの人口は年平均100万人ずつ増え続けたのである。

その人口増加を支えたものはジャガイモであったとされている。わずかな土地でも借りることが出来れば、人々はジャガイモを栽培した。ジャガイモは炭水化物とビタミン類を含んでいるため、都市で貧困にあえぎ、栄養不良をきたしている工業労働者よりもはるかに多くの栄養を取ることができた。結婚も早まり、子供もたくさん生まれた。こうしてアイルランドの人口は中部・西部・西南部の農村地帯に急上昇していったのである。

1841年から1851年にかけて人口が大幅に低下している。表で知る限りでは160万人程度の低下であるが、ジャガイモ飢饉が起きた1845年は900万人を越えていたのではないかと推測される。したがって、ジャガイモ飢饉を経験したことによって、アイルランドの人口は、単純計算では250万人以上も低下したことになる。ジャガイモの普及によって、アイルランドは人口が上昇し、その病気によって不作となり人口が急降下したのである。

1846年、「穀物法」が撤廃されると、自由貿易主義と市場経済主義が徹底され、アイルランドにもその政策は厳格に及んだ。イギリス人の考える市場経済とは無縁の世界に生きていたアイルランド農民は、ジャガイモ飢饉によって食糧を手に入れる術を失ってしまった。地代として納めるためにつくったお金以外に手にすることのなかった人々が、食糧を買わなければならなくなったのである。買えなければ死ぬ以外に手立てのない農民は政府の思惑通りに死んでいった。また、利益だけを求める地主は小作人が餓死しているにもかかわらず、収穫高が不安定な上に人手のかかるジャガイモや穀物栽培から牧畜酪農へと方針を変えた。追い討ちをかけるような急速な合理化によって、土地を追われた小作農民は、海外へ逃れて行ったのである。

〔参考文献〕

- * ムーディ・マーチン編著、堀越智編訳『アイルランドの風土と歴史』（論創社、1987）
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound Press, 1994)
- * リチャード・キレン著、鈴木良平訳『図説アイルランドの歴史』（彩流社）
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1980)
- * 川北稔編『イギリス史』（山川出版社）

(2) 高い死亡率と医療問題

1840年前後、人口の増加が著しかったのは特に貧しい農村部であったが、そこには病院や診療所がほとんどなかった。

病院、診療所の数

ダブリン州	6,286人に対して1
ミース州	9,305人に対して1
ダウン州	約2万人に対して1
ロングフォード州	約2万人に対して1
メイヨー州	約36万人に対して1

左表^(註3)からも分かるように病院・診療所の数は非常に少なく、農村部に至ってはほとんどない状態であった。メイヨー州は州の全人口に対して1箇所あるに過ぎなかった。

これらの病院や診療所は「アイルランド貧民救済法」(Irish Poor Law)が1838

年に施行されたときにつくられたものであった。しかし、その実態は間に合わせ程度につくられたものであり、医療交付金はほとんどなかったのである。しかも、数は極めて少なく、病院で28箇所にとどまり、市に相当する町でありながら設けられていないのが実情であった。例えば、ロスコモンには3万人の人口がありながら、設けられてはいなかった。ジャガイモ飢饉が発生すると、ロスコモン州は西部・西南部の州に並ぶ犠牲者を出した。

診療所は約450箇所設けられた。ダブリン州は都市部を除くと、24箇所ですべて7,333人に対して1箇所あるに過ぎなかった。このような医療施設の遅れを招いた理由の1つに医療は慈善事業と考えられていたことがあげられる。すなわち、地方は寄付金に頼っていたのである。地主や大事業家などが医療慈善者として資金を提供するというのがイギリスの方では常識であったのが、アイルランドではその常識は通用しなかったのである。多分、政府はそのようなアイルランドを見下すだけで、アイルランドの立場に立ってその問題を改善する努力はしなかったのであろう。

アイルランドの医療問題を考えるとき、見落としてはならないことがある。それは、当時、アイルランドの農村部の社会構成そのものが非常に複雑であったということである。社会は完全に2分化されていた。1つは町の社会である。町は街道筋に形成され、その地域の中心であった。その住民はプロテスタントが比較的多く、プロテスタント系の教会があり、学校があった。住民は個々に土地を有し、作物もジャガイモ以外の野菜などを栽培し、乳牛などを飼っていた。イギリスからの情報も手に入り、飢饉の時にはプロテスタ

ントの慈善団体からの援助も受けることができた。もう1つの社会は地主から土地を借りて生活している貧しい人々の社会である。その社会は町から離れた所に集落を形成していた。そこには学校も無く、同じような小家が立ち並んで、ジャガイモに食生活のすべてを依存していた。もちろん、医者も存在しなかった。外からの情報もほとんど入って来なかった。アイルランドの古い文化、今日言われている「ケルティック文化」が残されていたのはこうした集落である。彼らは町の住民との交わりを避け続けた。

さらに、町から遠く離れた山間部などの奥地に、狭い土地を年契約で借りて生活している極貧の集落も存在していた。

病院や診療所は医者が巡回で来ることのできる場所、すなわち、街道に面した町につくられたのではないかと考える。したがって、人口が密集する町が無い州、あるいは、街道が州の中心を横断しておらず、隅を掠めているような州は病院や診療所の数が少なかったに違いない。ジャガイモ大飢饉の時にも、集落部の被害状況の把握がはかどらなかったのは、こうした社会構造が原因であったと考えられる。

地域の大飢饉の間(1846-50年)

の死亡率(人口に対して12.5%以上)

メイヨー州	約 12.5-14.9 %
コーク州	約 12.5-14.9 %
クレア州	約 15 %以上
ゴールウェイ州	約 15 %以上
ケリー州	約 12.5-14.9%

左表(註4)はジャガイモ大飢饉で死亡率の高かった州であるが、どの州も山間部と湖沼の多い、地形の入り組んだ所である。

カトリック教徒の世界は被支配階級として固定され、閉鎖的な環境を形成していた。1790年に緩和された「刑罰法」(Penal Law)(註5)の後遺症を、1840年になっても引きずっていて、カトリックはプロテスタントとの交わりを避け続けた。大学への進学や政治家になるという将来の夢や希望などはとてももてない環境の中で、子供たちは育った。それで村の外の情報やすすんだ新しい知識に疎いまま成長し、土地を受け継いで古い慣習に従って生きたのである。

カトリックの神父は村人のモラルや教育については強い発言力と影響力を持っていた。子供たちも宗教的な戒めだけで、モラル教育をされていた。そうした子供たちは、意志や努力によって自分たちの生活に、将来、変化が起こるなどということは想像すらできなかったのである。カトリシズムと慢性的貧困がかねらの世界を完全に閉じ込めてしまっていたのである。

将来の生活設計は何も持てないまま、若い男女は結婚を急いだ。そして、女は若くして子供を産んだ。子供を増やせば生活はどうなるか考えることさえできずに、ひたすら産めるにまかせて産んだ。こうして、死と隣り合わせの生活でありながら、アイルランド農村部に人口は増え続けたのである。

集落に病人が出たり、出産があった場合、どうしていたのであろうか。ドルイドの伝統

アイルランドの死亡者の数

1843年	70,499人
1844年	75,055人
1845年	86,900人
1846年	122,899人
1847年	249,335人
1848年	208,252人
1849年	240,797人
1850年	164,093人
1851年	96,798人
1852年	80,112人

を汲むような老人が存在して、助産をしたり、薬草を煎じて飲ませた。また、アイルランド人特有の迷信が根強く残っており、病人が出ると、妖精が死者の国から迎えにくるのを妨げるために家の戸を全部締めて暗くし、カトリックの祈りを捧げて回復を願う習慣も存在した。無医村で、根強い迷信と極貧の生活によって、幼児の死亡率は20パーセントを超えていた。

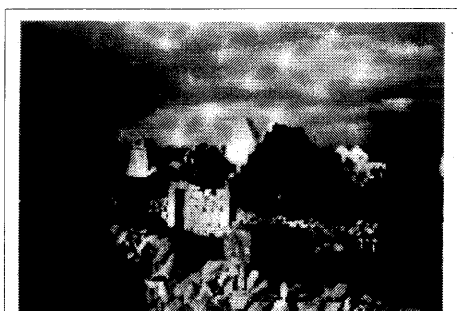
左表(註6)はアイルランドの死亡者の数であるが、ジャガイモの茎が腐り始めた1845年は前年を少し上回る程度であった。しかし、その翌年には5割近くも死亡者の数は増えている。翌年はさらに2万人以上増えている。年を追って1850年までは異常に多いの

が分かる。もちろん飢餓が続いていたからであったが、その大きな原因は病院が無かったことに拠るのである。病院や病棟がまったく不足していたことが、多くの死亡者を何年にもわたって出し続けたとも言えるのである。

因みに、アイルランドで、飢餓による衰弱死は1846年で1万人弱、1847年で2万人弱、1848年で1万5千人弱となっている。ジャガイモ飢饉における実際の死因は多くが何らかの病気であったのである。

〔参考文献〕

- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound Press, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989)
- * ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社, 1998)
- * Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)



ゴールウェイ州コンネマラ地方に残る大飢饉当時の家の跡

(3) 土地制度の問題

アイルランドの大地主はその多くが、教養あるイギリス人であり、プロテスタントであった。彼らは、アイルランド人の生活習慣や風習、さらには信仰を共有しないようにして、カトリック教徒を遠ざけた。一方、小作人は地代さえ払っておけば、地主とは距離をおくことが出来たので、土地の又貸しや分割分与を勝手にするようになっていた。

借地を細分化して又貸しするアイルランド特有の制度はコネイカ制度と呼ばれていた。ザッカーマンによると、その制度とは、土地を持たない労働者が借地小作農家から、「単年に作物—普通はジャガイモ—を栽培・収穫する権利の目的で耕地を賃借りする」ことであり、その土地の面積は1000平方メートルほどであった。要するに、小作農家は借地の一部を貸し出して、その借地人を労働者としてこき使い、高い地代を取り上げて地主に地代として納めた。こうした末端の借地労働者の数は増え、アイルランドの人口増加の一因ともなったのである。



〔カイルモア修道院〕現在は聖ベネディクト修道会の修道院として有名であるが、建てたのは Mitchel Henry (1826-1911) で、妻へのプレゼントであった。このように中世のお城に擬えて建てられた館を城館(Castle)と呼んだ。

アイルランドの土地制度は少数のプロテスタントの地主(landlord)と、カトリックの土地持ちの小農民(farmer)と小作農民(peasantry)に分けられたが、小作農民はさらに幾つかの階級に分けられていた。地主は所有地の一角に中世のお城に似せてつくられたカースルと呼ばれる城館(castle)や館(house)を構えていたが、実際は地主の多くがそこに常住することはなく、ダブリンやロンドンに住んでいた。

地主は、土地管理人(land agent)や地代取り立て人(bailiff)などを雇い、小作人から徹

底した地代の取立てを行った。さらに小作農民もいくつかの階級に分かれており、地代を払って、土地を自分のものとしてある程度自由に活用できる借地農民 (tenant farmer) とコネイカを借りて働く小作人 (cottier) が存在した。彼らの家はコテッジ (cottage) であった。さらにそれとは別に農繁期のときだけ雇われて働く、土地をまったく持たない季節労働者 (spalpeens) ^(註7) が存在した。彼らはキャビン (cabin) に住んだ。

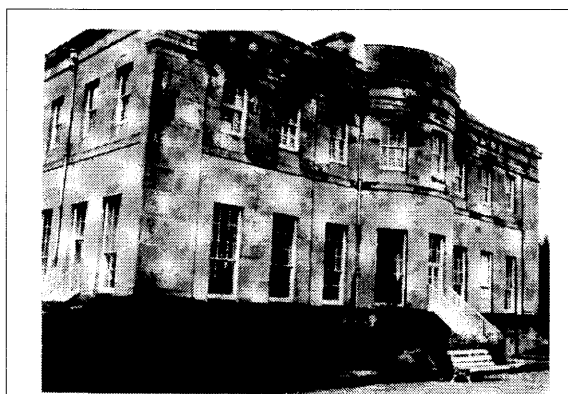
アイルランドの土地を受け継いだ地主たちの多くは、土地は多くのお金を手に入れることのできる財源と見なしていた。1842年には、600万ポンドにおよぶ小作農民から地代として取り上げたお金がアイルランドから外国へ出て行った。多くの地主がアイルランドには年に1度か2度、避暑か静養に戻るだけで、外国でお金を使った。一生に1度も戻ったことがない地主もいたということである。

そういう不在地主は絶対的な権力を代理人の手にゆだねた。その土地では支配者と小作農民とが敵対関係にあり、小作農民の生活の安定は保障されず、将来についても前向きな取り組みがなされなかった。小作農民は地主に対して反感を抱き、邪魔物を見るような目で見た。また、飢えた女や子供たちは地主に物乞いをしてつきまとった。一方地主の優越感と誇りは邪教カトリックの貧民の中で暮らすことを許さなかった。そうした地主は土地の改善や小作農民の生活向上のために、配慮したり、お金を使うということなどは決してしなかった。彼らは多額の地代収入をロンドンやパリに住んで、豪勢な社交界で派手に使った。こうした地主のもとでジャガイモ飢饉の犠牲者は多く出たのである。

しかし、一方、アイルランドの地主がすべて無責任な不在地主であったというわけではなかった。自分の土地にいて、小作農民のために事業を興し、農地を拡大し、生活が少しでも向上できるように教育にも力を注ぎ、率先して働いた慈悲深く、親切な地主も存在していた。そうした地主の中には、小作人が家を建てるのに奨励金を出したり、道路を拡張したり、農業専門家を雇って土地や作物の改良に努力し、排水路を設置し、小作農民の土地の又貸しを規制した。さらにまた、心有る地主は飢饉のさなかにも、小作農民のために食物確保の努力や海外移民の援助をした。さらに、1846年に設立された「地方救済委員会」(Local Relief Commission) には積極的に役割と責任を負担する地主もいた。大飢饉の時には、借地料として小作農民が納めていた穀物類を小作人に返したり、借地料を免除したりした。

ティパリー州のある地主の奥さんは、町で見つけた肉やパンを全部買い上げ、小作人たちに配った、という話も残っている。また、スライゴー州の「リサデル・ハウス」(Lissadell House) で有名なゴア・ブース家のロバート卿も乳製品の加工業を起こし小作人を雇って人々の生活をまもった。

ジャガイモ大飢饉の2年ほど前の1843年、オコンネルが「合同法」撤廃運動を盛り上げ、カトリックの解放とアイルランド自治を呼びかけていたとき、政府はアイルランド人民の不満の根は土地問題にあると考えた。そこで「王立委員会」(Royal Commission) を設立し、アイルランドの土地の所有に関する法とその施行にあたっての事前調査を行うことにした。この委員会



スライゴー州に現存するリサデル館

1830年代に建てられたゴア・ブース家の家。

ロバート卿はジャガイモ飢饉の時、この家を抵当に入れて小作人を助けた。1916年、イースター蜂起の首謀者コンスタンス・マーケヴィツはロバート卿の孫娘。

はデヴォン伯爵がその長を務めたので通称「デヴォン委員会」(Devon Commission) と呼

ばれた。デヴォン伯爵はアイルランド全土を歩き、1100人の参考人から証言を集め、膨大な量に及ぶ報告書をまとめた。セシル・ウッダム-スミスによると^(註8)、その報告書は、地主のために貧困は拡大し、小作農民への生活の保障と配慮が全くなされていないことをあげて、変革を訴えていた。この報告は、アイルランドの悲惨な現状を産み出している根本原因が地主と小作農民との間の悪い関係にある、と断定していた。そして、アイルランドは征服された国であって、アイルランドの小作農民は土地の所有権を奪われた者たちであり、地主の大半は異国からの征服者である関係の中では、イギリスに存在するような同胞意識が生まれるはずはなく、領主への忠誠心なるものも存在しようがない、とアイルランド人民の実情を正確に踏まえたものであった。イギリス人の一方的な、強権的な見方に警告を与えるものでもあった。しかし、政府はこうしたアイルランドの土地問題に対してデヴォン委員会の警告を真摯に受け止め、有効な打開策を打ち出すことができていれば、ジャガイモ飢饉に纏わる惨事を回避することができたかもしれないが、残念ながら政府はその努力を怠ってしまったのである。

「貧民救済法」(the Poor Law)が1838年に施行され、極端な生活困窮者に収容施設を提供することが目的であった。1845年の初めまでにはアイルランドに118の施設が開設され、救済を求める生活困窮者に門戸を開いた。しかし、施設に入るには非常に難しい条件が課せられていたために応募者は非常に少なかった。家族は、男女で別々の収容施設に入らなければならず、子供も大人から離された。被収容者は外出が禁じられ、食事も1日2食に限定され、食事のメニューもオートミル、ジャガイモ、バターミルクなど粗末なものであった。施設内の規則は極めて厳しく、飲酒と怠慢、仮病と反抗、などは禁じられた。また、健康な大人は労働に従事しなければならなかった。男は石割などの肉体労働、女は編み物などであった。

クリスティヌ・キニアリイ^(註9)は、生活困窮者収容施設が建設された当初から飢饉や大災害が発生した場合は考慮されていなかった、と書いている。ブリテンでの貧民救済の目的がアイルランドにも適用されていた。アイルランドでは1800年頃から繰り返し飢饉に見舞われ、その度毎に大勢の農民が飢えと病気で死んでいた。大きな飢饉となった場合には、その程度の「貧民救済施設」(Workhouse)ではほとんど用を足さないということは、わかる人にはわかっていた、と書いている。

〔参考文献〕

- * ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいもーポテトの文化史』(青土社,1998)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound Press, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput,1994)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989)
- * Liam O'Flaherty, *Famine*. (Wolfhound Press)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)

(4) ジャガイモの普及と飢饉の季節

ジャガイモは、イギリスの貴族で、エリザベス一世から絶大の信頼を得ていたウォールター・ローリー卿がアメリカ大陸に渡ってイギリスの植民地を築き、1586年に、アイルランドにジャガイモの茎をマンスターへ持ち帰って植えたことから始まったとされている。それ以後、マンスターのコークがアイルランドでのジャガイモ発祥の地となって、そこからアイルランド全体に広まって行った。19世紀にはジャガイモがアイルランド全土に広まり、貧しい小作農民の食生活を支えたが、また皮肉なことに、そのジャガイモのた

めにアイルランド人は大きな災いをこうむることにもなったのである。

ジャガイモは痩せた土地でも栽培でき、狭い作付け面積では他の穀物類に比べてはるかに多くの収穫をもたらす。そのためわずかな土地でも、何家族かが生活することが可能であった。しかも、ジャガイモには他の穀物類にはないビタミン群などの栄養分が多く含まれていて、それにミルクがあれば人間に必要な最低限の一日分の栄養は補給できたとされている。しかし、アイルランド人が好んだバターミルクは小作農民でも40～50エーカーの土地を借地している農民に限られていたということである。実際には多くがジャガイモと塩漬けの魚を食べていた。(註10)

ジャガイモは栄養価が高かったが、他の穀物類に比べて大きな欠点があった。それは、湿気に弱く、長期の保存が効かないということであった。4月から5月にかけて植えられて、収穫は8月の終わり頃から始まった。収穫されたジャガイモは地中に掘られたピットに貯蔵された。しかし、保存期間は短く、夏の前までが限界であった。6月から8月にかけての夏季は小作農民にとっては大変厳しい苛酷な時期であった。新しいジャガイモがとれるまでは販売店でジャガイモかオート麦を買わねばならなかった。ジャガイモが販売店に出ている、大変な高値がついており、ひどい場合には市場価格に2倍以上の高値がつけられて売られていることもあったということである。小作農民は今後の収穫物を担保にして非常に高いオート麦を買わされた。オート麦は、現金をほとんど手にしない小作農民にとっては高価だったので「ツケ」で買わざるを得なかった。8月は、ザッカーマンによると(註11)「付け食いの月」であった。また、夏は例年飢餓の季節でもあった。

セシル・ウッダム-スミスはその夏のことを次のように書いている。(註12)

夏は古いイモの所蔵が切れて、新しいイモの収穫までの谷間にあたる時期であった。

6月から8月はミール・マンス(meal months)と呼ばれた。ジャガイモが切れて、そのかわりに穀物類を食べる。小作農民は「ツケ」でそれを買わなければならなかった。

ジャガイモだけを食べて、それだけに頼るようになったアイルランド人の食習慣は、絶えず飢餓の危機につきまといわれることにもなってしまったのである。ザッカーマンは「・・・1834年、ウィックロウ郡で慈善団体が夏場の天候不順を予測し、救済基金を募った。集まった金額で食料を配る段になると、この48時間以内に何も食べていない人々がつめかけてきた。この食料の分配がなければこの人たちは餓死するところだった」と書いている。(註13)

次にジャガ芋飢饉と救済活動の実態を示す略年譜をまとめてみた。

1728年 マンスターでジャガイモ飢饉。コークで全住民が暴動を起こす。

1739年 ジャガイモ全滅。

1740-41年 熱病、赤痢、天然痘が流行。2年間で25万人から40万人が飢えと病気で死亡

1800-01年 飢饉

1816-19年 例年になく冬が長引き、1816年の夏は冷たく湿度が高い。穀物類の収穫が激減。ジャガイモは小さく、湿る。泥炭が長雨のため乾燥せず、燃料が不足。部屋の通気と衛生が悪化。作物の不作のため収入源を失う。食糧不足と価格の高騰。野草を食糧にする。輸出用の貯蔵庫や穀物店やパン屋の配達が襲われる。1817年には疫病などが蔓延。結婚式や葬儀など人の集りはすべて禁止される。感染した風をつけた貧民が都市に流れ込み、ダブリンに蔓延する。1817年から1819年中ごろまでに全人口の4分の1にあたる150万人が疫病などの疫病にかかり、約6万5千人が死亡。

1821-2年 マンスターとコノハト地域でジャガイモ完全凶作。

ロンドンで11万5千ポンド、ダブリンで1万8千ポンドの寄付金が集まる。ザッカーマンによると、1817年と1822年の飢饉の時には、人々はいらくさ、野原がらしなどの雑草を食い、牛から抜いた血をオートミールに混ぜて飲んだりした。時には絶望のあまり畑から種芋を掘り出して口に入れた。次年の収穫は皆無になるが、そんなことに構ってはいられなかった。1822年の夏には、飢餓は最悪となり、人々は衣服まで質に入れ始める。彼らは沿海部では人々は海草を食べ始めた。1800-01年と1817年の死亡者は、いずれも4～6万と推定されている。ほとんどチフスが原因。1822年の死亡者はこれよりもはるかに少ない。

1830-1年 メイヨー、ドニゴール、ゴールウェイで凶作。

1832-4年、1836年 ジャガイモ萎縮病のため広域にて腐る。

1836-7年 広域にて不作。

1839年 不作がアイルランド全域に広がる。飢饉状態が続き、政府の救済活動が始まる。国庫助成金制度が設立。

1841年 多くの地域で凶作。

以上の年譜から明らかなように、ジャガイモがアイルランド農民の主食になって以来、飢え苦しむことになった。飢饉は農地を求めて人々が殺到した時期である1830年代に入って急激に増え、ほとんど毎年のようにどこかで起こっている。土壌の改善がなされないままジャガイモが植えられ、痩せていた土地がさらに痩せていったということが想像できる。アイルランド人がジャガイモを求め、馴染めば馴染むほど、飢餓と隣り合わせるようになってしまった。

〔参考文献〕

- * ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』（青土社、1998）
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)

第2章 ジャガイモ大飢饉と救済

(1) 1845年、「胴枯病」の感染

先に北アメリカとヨーロッパ大陸でジャガイモの収穫を全部駄目にした「胴枯病」(Blight)がドーバー海峡を渡ってイギリスへ入って来たことが、ピール首相のもとに報告された。ジャガイモ凶作に対する不安は、その時、アイルランドよりもイギリス国内の問題と結び付けられた。当時イギリスは失業者が増え、「穀物法」のために小麦の価格が下がらないこともあって、貧民救済施設の2回の食事をパンの代りにジャガイモにすることになっていたからである。

1845年8月、イギリスのケントで大規模にジャガイモを栽培し、セールスも手掛けていたパーカー氏は深刻な「胴枯病」の実態を報じた。彼がいつものように所有しているジャガイモの栽培地を馬車で見て回っていた。すると、前日まで順調だったジャガイモが

すべて病枯れしているのに気づいた。翌日、別の畑を見て回ったが、やはりそこも全滅していた。彼は以前にオランダとフランスで同じ状況を見ていたので、それが「胴枯病」と判った。彼はその時すでに事の重大さを察知して、この病気がアイルランドへ渡るならば「貧しい人々の多いアイルランドでは大変な大災害となるであろう」と思った。このパーカー氏の予感は、見事に的中した。^(註14)「胴枯病」がアイリッシュ海を渡って来るのは時間の問題であった。

1845年6月初旬、アイルランドでは、ジャガイモの茎は順調に発育していた。天候は乾燥し、暑かった。しかし、中旬になって天候は突然変化した。アイルランドの天候がいかに気まぐれであるとしても、その6月中旬の変化は異常であったとされている。どんよりと曇り、気温は上がらず、身を切るような冷たい霧雨が降り続いた。7月にはいって、本格的な夏を迎え、暑く晴れた日が続いていた。8月の始めに、また、天候が突然くずれた。みぞれが降り、雷がなり、大雨が降った。風に乗って異臭が漂い、凶作の前兆は嗅覚を通して感じられた。だが、アイルランド農民はほとんど気にとめなかった。

9月中旬に「胴枯病」ははっきりとその姿を現した。農夫がジャガイモを掘りあげるとすべて腐っていた。天候異変とともに、驚異的な速さで「胴枯病」はアイルランド全域に広がっていった。8月に掘りあげて、ピットに保存していたジャガイモも異臭を放って、家畜にも食べさせられない状態にまでなっていた。翌年の農繁期までの6、7カ月分の唯一貴重な食糧は腐敗の塊と化してしまったのである。

アイルランドの貧しい農民は、イギリスの農園経営者と違って、ジャガイモの腐敗や悪臭の原因が何であるのか当初判断できなかった。雨とともに空から降って来たのか、地から湧いてきたのか、土壌そのものが病気に汚染されているのか、さまざまな疑問を抱いてはうろたえるだけであった。

10月になるとマスコミ誌に報告が寄せられた。カーロウ州の主婦は「掘った時にはジャガイモは正常だったのですが、煮るとそれらの発する悪臭には耐えられませんでした」、それらが体に害がないものと信じていますが・・・」というものであった。^(註15) 情報と知識の不足に人々は戸惑い、混乱した。

政府は「アイルランド科学調査委員会」(Scientific Commission in Ireland)を設立、知識人や科学者をその委員に任命した。しかし、彼らの仕事の主なものは、第1に健康なジャガイモを疫病から守ること、第2に病気になったジャガイモを料理にうまく役立たせること、第3に翌年のために種芋を確保すること、などであった。実際には、この委員会は、戸惑う人々に対して、腐ったジャガイモの食べ方を指導したり、的外れのジャガイモの保存の仕方や腐らないようにする予防手段を勧告したに過ぎなかった。科学者や知識人は真実を人々に教えなかったのである。「胴枯病」がどういうもので、どんなに恐ろしいものか、また、アメリカ大陸からヨーロッパ大陸に渡って大きな被害をもたらした病気であ

アイルランド西部・南西部の文盲率 (1841年と1851年)				
西部・南西部	1841 女性	男性	1851 女性	男性
メイヨー州	80%以上	60.79%	80%以上	60.79%
ゴールウェイ州	80%以上	60.79%	60.79%	60.79%
ラウス州	80%以上	60.79%	60.79%	40.59%
コーク州	60.79%	40.59%	60.79%	40.59%
メメリック州	60.79%	40.59%	40.59%	40.59%
クレア州	60.79%	40.59%	60.79%	40.59%
ロスコモン州	60.79%	40.59%	60.79%	40.59%
スライゴー州	60.79%	60.79%	60.79%	40.59%

ること、さらにまた、ヨーロッパ大陸では何がジャガイモ飢饉の被害から救ったか、といった肝心なことは何一つ伝えようとはしなかった。人々は無知と無情報の中に取り残されたままであった。アイルランドのジャガイモ飢饉が、世界の歴史に大きな影響を及ぼすほどまでの大事件になったその発端の1つに人々が適当な情報を入手できなかったことと無知があげられるのである。

前表^(註16)からわかるように西部・南西部の文盲率は非常に高かった。女性は特に高く、外部からの情報が、地形的に情報伝達が行き届きにくいということもあるが、届いたとしても、伝わらなかったと考えられる。情報が伝達されないということと併せて知識も入っていかなかった。地方の人々は、ただうろたえるだけで何かなす術を知らなかったのである。教会の聖職者のもとへ行き、事の成り行きと惨状を訴え、祈ってもらうのが、人々の為し得る唯一つのことであった。因みに、文盲率は1841年から10年間でかなり改善されている。これはジャガイモ大飢饉の教訓が生かされつつあったように思える。

11月、州人口の10分の9までがジャガイモに依存していたメイヨー州ではすでに深刻な事態に陥っていた。メイヨー州のある聖職者はフリーマンズ・ジャーナルに次のような手紙を寄せた。^(註17)

8日ほど前には完全に正常であったジャガイモが今日は腐っているのです。このあたりは極めて悲惨な状態にあります。人々は落胆し、どの顔にも涙があふれています。

この涙は悲しいから流しているのではなく、飢餓によって目から自然に流れ出るものである。また、11月中旬、ダブリンの大司教ドクター・コーレイは、すべてのカトリック教会に対して、慈悲深い神様がわたしたちの上に差し迫っている災いをどうかお避けになってくださるお祈りを捧げてくれるように、と人々に求めた。^(註18)

〔参考文献〕

- * ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)
- * Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput,1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book,1989)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)

(2) 救済委員会の設立

1845年の終わり頃、ダブリンの市民は「マンション・ハウス委員会」(Mansion House Committee)を設立し、深刻になりつつあるジャガイモ飢饉に対して何らかの救済策をとってくれるように政府に申し入れたことがあった。その委員会は飢饉の現状を書き記した多数の手紙を地方から受け取っていたのである。

首相ピールはロンドンで、そうしたアイルランドからの飢饉の報告を受け取っていたが、アイルランド人特有の話に誇張があると思っていた節もあった。しかし、一方ではアイルランドの全人口の4分の1余り、すなわち当時は250万人近い貧しいアイルランド人が、夏を半飢餓状態で過ごさねばならないことも、すでにデヴォン委員会から報告を受けてよく知っていた。

11月、ピール首相が有効な救済策を施行するには、あらゆる種類の食べ物を輸入できるようにすべての障害を取り除く必要があった。すなわち、最低限の生活に必要なすべての物に関税をかけることは全面的に完全撤廃する必要があった。しかし、真相は、ピー

ル首相はアイルランドのジャガイモ飢饉を理由にして、実現が難しいとされていた「穀物法」撤廃を成し遂げようとしたのである。

救済策として考えたのが、アメリカ合衆国からインディアンミールを大量に購入するというものであった。インディアンミールはイギリスでは食べられたことがなく、誰もその購入に関心を払わなかったらしい。しかし、「穀物法」が存在する限り、法を犯すことになるので、ピール首相は極秘のうちにアメリカ合衆国にインディアンミールを10万ポンド発注、アイルランド南部の都市コークへ輸送し、政府管理の倉庫に保管して「穀物法」の撤廃を待った。

次いで、ピール首相はダブリンに「救済委員会」(Relief Commission)を諮問した。そして、アイルランド救済委員会が1845年11月、ダブリンに発足した。この委員会の活動は当初限られており、アイルランド全州に食糧貯蔵所をつくり、食糧管理をすることだけであった。まず、「救済委員会」は主に食糧に関する情報の収集から始めた。イギリスとアイルランドの軍隊に蓄えられているビスケットや代替食糧の在庫を調べた。同時に、ジャガイモの病気の進み具合に関する情報も収集した。次いで、「救済委員会」の仕事を地方で実施する「地方救済委員会」の組織が始まった。インディアンミールの販売と保管はダブリンの「救済委員会」から「地方救済委員会」に委託された。

1846年の夏までに、「地方救済委員会」は各地域に648団体が発足した。その委員会は州の公務員、貧民救済法執行官、プロテスタントとカトリックの双方からなる僧侶などで構成されていた。委員たちはインディアンミールなどの救援食糧を売るだけでなく救済金の寄付を地主に募った。その委員会のもう一つの仕事、インディアンミールの倉庫の管理があったが、これが地方委員に苦難を強いることになった。1846年4月にインディアンミールの倉庫の門は開かれたが、無料配給ではなかった。無料配給はダブリンの「救済委員会」から厳禁されていた。アイルランドの小作農民は極貧状態にあった。お金をほとんど手にしない農民にとってわずかな価格といえども高くて買えなかった。「地方救済委員会」の委員たちは同郷の人々の悲惨な姿を見るに見かねて、規則を無視して、食糧の無料配給する者もいたということである。

政府はインディアンミールを無料配給にすることは断固拒絶した。地方地主からの助成金が十分に集められていながら、政府は、食糧を無料配給することによって市場価格が値崩れを起こすことを懸念し、無料化しなかったのである。人の救済よりも市場の安定を第一に考える自由経済の原則を徹底して守り抜いた。

その当時、経済政策の実権を握っていたのは、大蔵財務官のトレヴェリヤンであった。彼は血筋がよく、教養も高く、信仰深い紳士であった。彼は常に聖書を携えていた。信仰深く見える反面、アイルランド貧民の救済には関心を示そうとせず、まったく冷淡であったとされている。

テリー・イーグルトンによると、トレヴェリヤンは「大飢饉が神の怒りではなくむしろ慈悲であり」、「人間の愚行を無効にし、アイルランドを快適かつ豊かな土地へと変えてくれる」、あるいは「大飢饉によって、絶大に慈悲深い神の摂理と、『至上の叡知は一過性の悪から恒久的な善を引き出すことができた』」(註19)と言い切っていた。このトレヴェリヤンの思想は偏見というよりは、イギリス人がアイルランド人に対して長い歴史の中で抱きつづけてきた「優越意識」そのものである。アイルランド人の古い非合理的な慣習や迷信に対する近代的で合理的なイギリス人の「優越意識」はアイルランド人を愚行者、異端者と決め付けてきたのである。アイルランド人はその意識によって完璧なまでに押さえつけられてきたのである。

〔参考文献〕

* James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)

- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)
- * テリー・イーグルトン著 鈴木聡訳『表象のアイルランド』(紀伊國屋書店)

(3) 1846年、「胴枯病」再発生

1846年は世界的に穀物が不作であった。穀物の値段が急騰し、さらに、イギリスの産業は不況のどん底にあった。食糧の確保は世界的な問題にもなっていた。アイルランドのジャガイモ大飢饉は不幸にも、こうした世界的な状況の中で起こった。

1846年春にはすでに食糧の買えない絶望的な貧民が倉庫に押しかけて食糧を奪ったり、地代として納められる小麦やオート麦の荷車を襲う事件が各地で発生していた。また、羊泥棒も出るようになった。政府は貧民が餓死することよりはこうした事件の発生のほうを恐れていた。政府は地主やプロテスタントの私有財産や資産が侵され、秩序が乱れることにだけ最大の関心を払っていたのである。政府は夜間外出禁止令などを出して、アイルランド貧民に対して権力による弾圧をおこなったのである。

こうした状況に対してフリーマンズ・ジャーナルは1846年4月15日に次のように書いている。(註20)

骨を覆っている肌から骨が突き出しているような形相の人々によってクロンメル的小麦製粉所が襲われた。あたかも経帷子から起き上がって来たかのような窪んだ目でじっと見つめ、この災禍の窮状をもはや耐えることはできない、あの食糧は何としてでも手に入れなくてはならないとでも言ってるような叫び声をあげていた。わたしたちは夏になったら苦しまなければならない。国の災難は日を迫る毎に増大し、激しさを増している。

アイルランドはすでに絶望的な状況にあったが、政府は自由経済の原則を第一に重んじ、流通機構の混乱を最優先させてまで救いの手を差し伸べるようなことは断固としてしなかったのである。

1846年の秋は収穫が期待されていた。しかし、「胴枯病」はその夏が終わる頃に、再びジャガイモの茎を襲ったのである。救済委員会の活動は、豊作が期待されていただけに、それでもって打ち切りとなった。夏のジャガイモの実りを当てにしていた貧しい農民たちは、保存食もなく、インディアンミールすら買うお金も無く、飢えを癒す術を完全に失ってしまった。事実上、政府の取った強固な「自由放任主義」によって、アイルランド人は完全に見捨てられてしまった。そして、政府の大蔵官僚トレヴェリアンは、アイルランドの人口削減が自然に成し遂げられることはまさに神の思し召しだと考えた。

一方、1846年の夏はアイルランド小作の農民にとっては例年以上に大きな試練の季節になった。1845年の「胴枯病」は、ジャガイモに全面的に依存している小作農民にとってすでに致命的な打撃を与えていたからである。彼らは「ツケ」で食糧を購入することは限界に来ていた。夏にはほとんどの小作農民たちは衣類を「質」に入れて食糧を手に入れていた。衣類や寝具は冬には必要になるが、秋の収穫によって取り戻すことができると思っていたからである。しかし、「胴枯病」はこの年も秋に襲ったのである。1845年の飢饉ですでに地代と借金を溜め込んでしまった小作農民たちは、さらに借金を大きく膨らませなければならなくなった。見通しのつかない返済のために、販売店で「ツケ」による購入をお願いしても、断られた。飢餓の被害は最初に幼児が受けた。子供を亡くしてし

まった親の中には、腹いせに幼児の死体を店先に放置したり、投げ込んで行く者さえあったという。しかも、高利貸しが存在し、ザッカーマンによると、^(註21) 彼らは農民と同じカトリック教徒であったが、何の温情も抱かず、ジャガイモの値段を不当に吊り上げ、ひどい場合には倍以上の価格で「ツケ」売りにしたということである。

ピーター・フォインズによると^(註22)、1846年9月末に、1000人近い人々が鋤や鍬を手にスキバレーンへと行進し、口々に食糧をよこせと叫んだ。政府保管庫から食糧が売り出されたが、10月に入ると軍隊が投入され、騒ぎが収まった。それ以後スキバレーンの町は飢えた群衆の侵入と暴動に備えて、厳戒態勢がとられた。しかし、暴動どころか行進さえなかった。飢えた貧しい人々は道を歩く元気すら失っていたのである。

また、ゴールウェイ、ダンダーバン、ウォーターフォードでは食糧を求める暴動が発生した。なかには「食べ物よこせ」と叫びながら「貧民救済施設」の壁をよじ登る者もあった。こうした飢えと混乱状態が続くなかで、いっこうに公共事業再開の目処は立っていなかった。仕事がない人々は飢えるばかりで、体力を失いつつあった。1846年は10月に至っても、仕事を求める貧しい人々に何の対応がなされないままであった。

西部地方の窮状を見かねた1人の治安判事はメイヨーから政府に手紙を書いた。

あまりにも多くの同胞が皆死に絶えようとしている光景に心が痛みます。公共事業が開始されたとしても、多くの人々はもう働くことはできません。彼らは食べ物の不足で衰弱し切っています。わたしは何百人もの女や子供たちが古いジャガイモの茎を手に入れようと切り株だけの畑の中を捜し回っているのを見ました。^(註23)

トレヴェリアンはこれを読んで、政策の一部修正せざるを得なくなった。インディアンミールを再度アメリカから購入することにした。しかし、この第一便が到着したのはクリスマスに近い日であった。

〔参考文献〕

- * ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいもーポテトの文化史』（青土社、1998）
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)

(4) 1846年、公共事業雇用状況

貧しい農民は農耕よりも公共事業の労働を求めた。労働省の公共事業雇用計画で仕事を得た人数は6月には一日平均2万1000人だったのが、7月中旬頃までには7万1000人に急増した。そして、8月の第1週には9万8000人にまでになった。さらに、別の救済委員会や地方大陪審などの雇用計画で仕事を得た人々の数は4万人にも達していた。合わせると約14万人もの人々が何らかの仕事を得ていた。その雇用によって利益を受ける家族を含めた人数は70万人を超えていた。しかし、ジャガイモに全面的に依存する家族すべてを含んだ数は200万人を超えていた。家族も含めて、150万人に近い数の人々が公共事業の恩恵に浴することができなかったのである。

公共事業雇用計画が実際に実施されたのはクレア州、リメリック州、ゴールウェイ州、ティッパリー州、ケリー州、メイヨー州、ロスコモン州であった。1845年秋の飢饉が酷かった州に優先的に事業計画が立てられた。アイルランドでも有数の被害を受けたコーク州西部地域の救済事業は遅れた。

1846年8月、政府は新しい救済事業体制を発足させる前に古い体制の撤廃を打ち出した。旧来の公共事業の雇用の削減に乗り出した。8月第2週に入って削減が始まり、月末までには救済事業で収入を得ている人の数は1日平均3万8000人にまで落ち、その後も減少していった。9月末までには1万5000人を下回った。しかも、救済事業としての食糧の販売も抑制されたのである。

新しい体制とは救済事業を徹底した雇用事業の中央管理化と地方財政負担責任とを結合させるものであった。地方の地主は公共事業に多額の出費を余儀なくされたのである。これによって、公共事業はすべて政府の政策として一本化された。労働者の雇用は再び増え始めた。しかし、労賃の支払いは地方に財政負担させていたために遅れるようになっていた。それでも雇用登録者数は増え続け、11月末には28万6000人にまで達し、12月末には40万人を超えていた。彼らが従事した労働は道路工事が大半であったが、石割や石垣作り、歩道の建設などであった。仕事を提供して労賃を稼がせる、ただそれだけのために道路工事をさせたのである。

アイルランドの食糧価格は急騰し、1846年11月までに労働者は家族を養うためには週21シリング稼がなくてははいけないほどにまでなった。しかし、公共事業で1日働いても、6から8シリング以上の収入を得ることはできなかった。

12月、リートリム州を見て回った視察官は次のように報告した。

半飢餓状態の人々の悲惨な状況は食糧の途方もなく高い値段によってますます酷くなっています。公共事業で彼らが得られる労賃では、大勢の家族を養うに十分な食糧を買うにはとても足りるものではありません。(註24)

それでも、ほかに収入源を持たない貧しい人々にとって公共事業は救いであった。アイルランド西部の土地はどこも岩だらけで、岩盤を砕いたり、岩を取り除いたりする仕事は、機材を持たない人々が手作業でするには過酷な仕事であった。この事業は悲惨な出来事を生んだ。スキバレーンでは、1人の労働者が工事中に路上で死んでしまった。その数日後にまた新たな犠牲者が出てしまった。それらの犠牲者は、労賃の支払いが遅れたために、ほとんど何も食べられない日が続いていた。栄養不良の体で、週12時間、冬の厳しい気候条件の下で労働していたのである。貧困と飢えに苦しむ人々にとって道路工事は最初から救済事業の体をなせるものではなかったのである。

1846年のクリスマスまでにアイルランド各所の救済委員会には併せて40万人が雇用登録者名簿に名前を連ねていた。実際に政府から発行される雇用チケットを手に入れることができたのはその10分の1以下であった。

リチャード・ヘンリー牧師は雇用の実態次のように書いている。

わたしの住居の周りに群がる餓死寸前の多くの人々を見るとわたしは本当に心が痛みます。救済委員会に承認され、リストに名が載っていながら、政府役人に拒否された人々のグループが毎日わたしの家の周りを取り囲んでいるのです。特に、前の金曜日、それは委員会議の前日だったのですが、彼らは私の周りに群がって、わたしに介入してくれるよう嘆願しました。わたしはその時、わたしのでき得ることはすべてした。雇用チケットを配布してもらえなかったのは、わたしのせいでも、委員会のせいでもない。わたしの力ではみんなに希望を与えることはできない、と敢えて言いました。すると、頑丈で高齢の男たちの目から苦悶と絶望の涙があふれ出てきました。わたしは彼らの激しい苦しみがわかりました。今仮に彼らに仕事が与えられたとしても、多分彼らはそれを十分にこなせないのではないかと思います。彼らの力を見るから弱っており、彼らの希望と気力は既に失われているのです。彼らは海外へ渡る力もありません。彼らは貧しい小屋の中でやつれ、だれにも知られずに死んでいくだけなのです。彼らは忘れ去られ、記録に残らないのです。(註25)

〔参考文献〕

- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)

(5) 公共事業雇用救済策の失敗

公共事業のやり方には大きな問題があった。それは、土地の提供者である地主には何の利益ももたらさないということであった。地主は土地を提供して収入を得ることができないばかりか、労働力もその事業に取られることになってしまった。農民がいなくなった土地は放置され、荒地になってしまった。地主は新たな穀物の生産に着手することもできなくなってしまった。この痛手を大きく被ったのは小地主農民であった。彼らは土地を提供するばかりか、救済事業のための多額な税金を取られた。労働力も失い、どうにもならなくなって、その多くが土地を捨て、アメリカやカナダへと逃れて行った。

公共事業の雇用の増加は予測しなかった所へ波紋となって広がった。その1つは農業従事者の激減とジャガイモ作付面積の減少である。表〔A〕から分かるように、ジャガイモ

〔A〕 アイルランド全体 (0844-9 年) のジャガイモに関する資料

	作付け面積	生産高	1 エーカー当りの収穫高
1844年	約240万エーカー	約1500万トン	約6.2トン
1845年	約250万エーカー	約1000万トン	約4.3トン
1846年	約200万エーカー	約350万トン	約1.8トン
1847年	約40万エーカー	約200万トン	約7.0トン
1848年	約80万エーカー	約300万トン	約4.0トン
1849年	約75万エーカー	約430万トン	約5.5トン

〔B〕 アイルランドの穀物類生産量 (単位 ; 万トン)

	オート麦	小麦	小麦ミール粉	他を含めた全体
1844年	21.1	4.2	5.2	47.8
1845年	23.5	7.8	8.9	51.4
1846年	13.4	3.9	4.5	28.5
1847年	6.9	2.6	1.3	14.7
1848年	13.3	3.0	3.2	29.7
1849年	9.3	2.1	2.9	21.5

作付面積は飢饉が起こる前の年の1844年では240万エーカーあったのが1847年には40万エーカーにまで減少してしまっている。ジャガイモを作っていたのは小作人であり、地主の農園では、イギリスで商品価値のある穀物類や乳製品を生産していた。小作人が道路工事の労働者になってしまって、ジャガイモの作付けをしなくなったということが分かる。もう1つは、地主は地代が取れなくなったうえに、公共事業の雇用財務負担ばかりが増えて、経済的にも逼迫し、深刻な転換期を迎えてしまったということでもある。

上の表 (註26) から分かるように、1847年の1エーカー当りのジャガイモ収穫高が1844

年よりも多くなっている。この1847年は「胴枯病」は生じていなかった。しかし、作付面積は最も小さく、生産高は最低であった。この不可解な現象は公共事業を主体にした救済政策の失敗だけではなく政府が取った救済政策全体の失敗を物語っているのである。小作人は土地を捨てて、わずかな賃金を求めて道路工事の仕事に従事する。地主は農園に生産率の高い改良ジャガイモを作り、それを市場に出す。それによって救済事業の負担金を捻出する。貧しい人々は市場に出され、価格のつけられたジャガイモを販売店から買わねばならない。しかも、小売店は不当に価格を吊り上げる。こうした実態を知りながら政府は市場中心の経済政策を頑なにまもったのである。

農園から小作人が姿を消したうえに多額の救済事業費を負担させられた地主は苦しい立場に追い込まれていった。表[B] (註27)は穀物類の生産量を示したもののだが、穀物類の生産はほとんどが地主の農園でなされていた。

1847年の落ち込みの理由としては、特別な飢饉があったわけではないので、労働力不足があげられるのではないだろうか。その他、表にはないが、食肉用の家畜類の市場への出荷が1848年には激減している。それは、小作人が借地の一角に飼って、育てていた家畜類を市場に出していたのが、1847年にはその小作人がいなくなってしまったことの表れでもあろう。

〔参考文献〕

- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)
- * Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)

第3章 餓死の実態

(1) 「追い立て」と大寒波

公共事業を地方財政負担の救済事業にする政策がとられたために、財政を負担する地主は大変な苦境に立ったのである。小作人と地主の間で、それまでに少しは存在していた信頼関係や共存関係が完全に崩壊してしまった。地主は地代を引き上げ、取立てを厳しくした。飢餓と熱病によって稼ぎ手を失い、家族全体が寝たきりになっていた家は悲惨であった。経済的に逼迫し、農業経営の方向転換を強いられた地主たちは、地代を払えない小作人を情け容赦無く追い立てたからである。

ピーター・フォインズによると (註28)、1846年12月、スキバレーンのある地主が、地代が滞納になっている小作人の住処を訪ねた。小さなあばら屋の戸をノックしても何の応答もないので地主は戸の蝶つがいをはずして中に入り、窓枠をはずして明かりを中に取り入れた。中にはひとりの女性が横たわっていた。地主は上にかかっているぼろ布を剥ぎ取った。その女性は熱病にかかって、全裸で寝ていた。この家族は恐ろしい熱病を患いながらも、仕事に出ていた。この惨状を目の当たりにした地主はこの家族に同情することはなかった。

また、同じスキバレーンのジョン・マッカーシは検察官に、自分の父親は農場を持っていたが、ジャガイモが不作であったために、地主のトム・ダンストンに家と穀物を取り上げられ、土地から追い出されてしまった、と証言した。 (註29)

飢饉の最中であって人々が餓死したり、飢餓熱に苦しんでいるときにでも、多くの地主は冷酷な態度を示し、家を取り上げ、土地から追い立てたのである。追い立てられた家族は、運がよければ「貧民救済施設」には入れたであろうが、多くは山間部に着の身着のまま逃れるか、近くの町に出て街路乞食をする以外に生きる道は残されていなかった。

「追い立て」(Eviction)は実に残酷なものであった。ロバート・キーによると^(註30)、テリーマンズ・ジャーナルのある記者がゴールウェイで「追い立て」を目撃して次のように書いたとされている。

それはわたしがこれまで目撃した中では最もすさまじい光景であった。老若の女たち、破壊から財産を護るために財産の一部をもってあちこちに無我夢中で走り回っており、子供たちの悲鳴があがり、家とかくれ場所から引き出される母親たちはすさまじく泣きさけんでいた。まず最初に屋根と壁の一部だけが打ち壊された。しかし、その金曜日の晩にひどく貧しい身なりの者たちがその晩の避難場所を手に入れるために干し草で覆われている壁に数本の棒を斜めに組んで一定の位置に固定させた。翌日このことが気づかれると土地管理人が貧しい人々が廃墟の中に避難場所を作ったりすることを防ぐために壁をすべて引き倒し、基礎を根こそぎ取ってしまうように緊急命令をだした。

1846年から47年にかけての冬は歴史的な寒波がアイルランドを襲い、住む家を失った貧民たちの多くが悲惨な死を遂げた。1846年の秋、冷たい風が北ヨーロッパから吹き込んできた。イングランドでは12月中頃、流水の塊がテムズ河を漂ったということである。アイルランドにもその冬将軍のような大寒波がやってきた。本来アイルランドはメキシコ暖流の影響で冬は比較的過ごしやすい島であるとされており、冬に対して特段の配慮はなされていなかった。凍りつくような強風と深く積もった雪のなかを貧しい人々は防寒服もなくさ迷ったのである。住处を失った人々の死は国勢調査の死亡者の中には多分数えられていなかったであろう。彼らはアイルランドの岩だらけの山間部で寒さを防ぐこともできず、野たれ死にしたか、町の中で行き倒れになったか、身元を明かす人は誰もいない死に方をしたであろう。国勢調査の記録に残された死亡者数よりはるかに多い死者が、実際は、いたはずである。

1847年1月、中央救済委員の一人、ウィリアム・E・フォスターはコンネマラ地方の現状を視察して次のように報告した。^(註31)

(農村部を視察した)私は村人のジャガイモがなくなっているのに気づきました。彼らが集めていた貧しい作物はすべて食べつくされていました。オート麦類もなくなっていました。蕪類もなくなっていました。家畜も子牛以外はまったく見当たりませんでした。その子牛もすぐに食べられてしまうだろう。羊も豚も家禽類もほとんどすべて殺されてしまいました。…レンヴィル地所には約850世帯の小作人が住んでいて、彼らは世帯ごとに2から3頭の豚を飼っていました。それが今では12世帯も残っていないのです。

また、同じ月、コンネマラ地方の中心クリフデンの救済委員会のもとに地方救済委員からある村の惨状が報じられた。

人々はまるで犬のように死んでいる。昨晚家の離れに這いながら入って行った一人の女性が翌朝死体で発見された。彼女の体の一部は犬に食べられていた。

一輪手押し車に別の死体が運ばれていた。その死体は偶然通りかかったある紳士が棺代を立て替えてくれたので納棺されたが、もしも、その紳士がお金を立て替えてくれなかったならば、その死体は一枚のシーツにくるまれたまま、地面に投げ捨てられていただろう。死体の多くは棺に納められることもなく、教会で葬式をしてもらえず、埋葬されることもなかった。生き残っている家族があっても、ほとんどが衰弱しきつ

ていて、死体に土をかけることさえ出来なかった。(註32)

クリフデンで委員会が開かれ、さまざま惨状が報告されている時にも、大勢の人々が公共事業の認可証を求めて集まってきた。しかし、悲しいことに公共事業は、政府によって、すでに縮小の政策が取られていた。

〔参考文献〕

- * Kathleen Villiers-Tuthill, *Patient Endurance, The Great Famine in Connemara*. (Connemara Girl Publications, 1977)
- * Peter Foyne, *The Great Famine in Skibbereen*. (Irish Famine Commemoration Skibbereen Ltd, 2004)
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991)

(2) 戸外救済活動

1846年秋の絶望的な悲しさは、ジャーナリストや聖職者ばかりでなく、政府から派遣された視察官からもイギリスへ報じられるようになっていた。政府のトレヴェリアンは直接にその報告を受けていた。しかし、一方でそれとはまったく矛盾した情報も得ていた。餓死者が出ている地方にも十分な食糧がイギリスから搬入されているというものであった。事実、貯蔵庫や食糧販売所には十分な食糧があった。それらは高い価格で売られていた。トレヴェリアンにとって自由市場経済の秩序を守ることはもっとも大切なことであったので、現地価格で売ることは認めても、絶対に無料配給を認めようとはしなかった。食糧は有る所には十分に有りながら、一方ではそれを手を入れることができないまま、一家全滅の惨状が存在していた。

アイルランドの惨状を知ったイギリスの一般市民の間で、救済への動きが出始めた。プロテスタント系の宗教団体も救済にのりだした。特にクエーカー教徒はアイルランド西部に直接入って、スープ・キッチン (Soup Kitchen) を開き、積極的に食糧の無料配給をした。

フレンド協会 (Society of Friends)
の食糧支援量

10万人につき

コーク州	200トン以上
ケリー州	200トン以上
クレア州	200トン以上
ゴールウェイ州	200トン以上
メイヨー州	200トン以上
ロスコモン州	150-200トン
リメリック州	100-150トン
スライゴー州	100-150トン

左表 (註33) は、「中央救済委員会」が母体となって出来た「フレンド協会」の食糧支援の量である。「フレンド協会」の実際の活動はクエーカー教徒が中心になって行われていた。その活躍は目覚しかった。支給したのはスープだけではなく、下痢に苦しむ人々のためにライスも配給した。その他、海外で仕入れたビスケットや豆類など即効性のある支援と作物の種子の配給、さらに小規模企業の支援基金提供といった長期展望に立った支援を同時に行った。

1847年1月、政府は結局、救済事業としての公共事業を諦めた。それに代えて、スープ・キッチンを設置した。アイルランド窮民暫定救済法 (Act for the Temporary Relief of Destitute Persons in Ireland)、通称スープ・キッチン法 (Soup Kitchen Act)、を制定し、各地に食事配給施設を設置した。これによって、それまで行っていた「貧民救済施設」に収容して労働を提供し、救済するといった限定的な救済から、「戸外救済」 (Outdoor Relief) 体制へ移行した。

しかし、実際、貧しい人々の体力の衰えはすでに限界を超えており、多くが歩行すら困

難であった。多くが家から出ることができず、わずかに体力の残っている者が近辺から食糧を集めるのがやっとであった。体力ある者が家族を代表してスープをもらうために長い距離を何時間もかけて歩いた。特に、家畜はすべて食べつくした過疎地の人々はスープ・キッチンが開かれた町まで歩いていかなければならなかった。途中で転んで骨を折って動けなくなりそのまま死んでしまった、また、風邪をひいて熱を出し歩けなくなって行き倒れになり、死んでしまうということさえ起こった。

一方、公共事業の打ち切りによって、20万人以上が職を失った。政府の救済体制がスープ・キッチンに移った後も、多くの人々は食糧無料給付よりも、労働を求めている。多くはどんなに貧しく、絶望的な中であっても、鍋やボールをもって列をつくって並ぶことを恥だと思っていた。屈辱を受けるよりはすすんで飢え死にする者さえあったということである。

慈善団体もスープ・キッチンを開いた。そこでは陰湿なカトリックとプロテスタントの戦いがあった。プロテスタントは英国本国の慈善団体からもたらされた豊富な食糧をスープにして、救済事業として飢餓に苦しむアイルランド人に振舞った。しかし、これには条件がついていた。カトリックからプロテスタントへの改宗である。聖母マリアへの信仰を捨てることが一番大きな条件であったらしい。多くの人がこの条件をのんでスープを手にした。ザッカーマンは次のように書いている。

中部と西部のプロテスタント伝道師の一部は、改宗者の獲得に奔走し両派の対立に拍車をかけた。慈善の美名のもとで改宗をうながす動きは、少数ながら、金曜日に肉入りスープを振舞ったりした。また、卑劣なプロテスタント伝道師の中には、援助の提供に先立ち、カトリック教徒に信仰を捨てるか聖母マリア像を侮辱する行為を求めたりした。いわゆる「踏み絵」である。(註34)

プロテスタントの攻勢に対して、カトリックは弱い貧民を救済するのではなく、説教などで人々を責め立てたのである。プロテスタントへの改宗よりは餓死を選択させようとした。死後の恐ろしい観念を信じ込ませ、脅迫したのである。信心深いカトリック教徒たちはこの世の地獄を見ながら、死後の天国を夢見て死んでいったのである。

1847年の夏から秋にかけて、世界の食糧事情は好転し、穀物類はアイルランドの地にも多く入ってきた。また、アイルランドのジャガイモを除く穀物の生産も良好であった。こうした食糧事情の好転がさらにアイルランド貧民をさらに深い奈落の底へと陥れることになった。政府のスープ・キッチン救済体制は9月の末に打ち切られてしまったのである。

貧民たちの唯一の糧であるジャガイモの収穫は非常に悪かった。その年は「胴枯病」は発生しなかったにもかかわらず、すでに種イモが食い尽くされていたために、栽培できず、収穫はほとんどなかったのである。糧を求めて大地をさまよっても、すでに、犬もロバも野鳥も蛙も自然の中に生息する食べられるものはすべて食い尽くされていた。しかも、彼らはそれほど過酷な状況の中にあるにもかかわらず、地主が所有する土地や川の中に立ち入ることはできなかった。一家全滅どころか集落全体が全滅の悲報が次々と報じられるようになった。

ラリー・ザッカーマンはベネットという一人の旅行者の手記をもとにして、飢餓の状況を次のように書いた。

ドニゴール州のアラン島では、海草と笠貝だけが頼りの食べ物だった。ほかの地域でも人々はタンポポの根、羊歯類、ナッツ類、ベリーのたぐい、木の葉、特定の木の皮を口に運んだ。かぶ、キャベツ、えんどう豆、そら豆などが手に入る地域では人々はもちろんこれを食べた。しかし、飢饉はこれらが栽培されていない地域でしばしば過酷をきわめた。メイオー州のエリス地区もその一例である。小作農は蕪の栽培をためらった。地主が収穫を差し押さえるのではないかという懸念からである。この懸念は

残念ながら現実となる。カラスや海鳥を捕獲する機転のきく連中は、その肉を食べた。かたつむり、蛙、ハリネズミも同様である。ウィックロウ州の記録によれば、人々は川からうなぎと鱒を取り尽くした。(註35)

アイルランドは島国で周辺には海洋が広がっている。なぜ、ジャガイモ飢饉の飢えを漁獲など海産物で補うことができなかったのか、という疑問が湧いてくる。沿岸の農民はほとんどが漁業と兼業であった。しかし、今日のような漁船はあるはずはなく、すべてがカラックと呼ばれる3人乗りの軽い手漕ぎのボートで魚を獲っていた。大西洋の荒波と変わりやすい気象条件の下、一家の働き手の命が一瞬のうちに奪われていった。こうした過酷な自然環境のもとにある貧しい農民を襲ったジャガイモ飢饉は当面の食糧確保のため、借金をせざるを得なくなってしまった。借金といっても現金を借りるのではなく、「ツケ」で当面の食糧を確保することであった。漁獲用の網や道具はその担保として取られてしまったのである。

ゴールウェイ州コンネマラ地方はそのほとんどが山間部で占められているが、入り江が深く入り込んでおり、豊かな漁場がたくさん存在する。この地域も当然のことながらジャガイモ飢饉の大きな打撃を受けていた。中央救済委員会視察官として派遣されたディーンは海辺の住民の生活を見た。魚はよく取れており、海の幸には希望が持てたようだった。しかし、問題はその幸がどうやって貧しい人々の手に渡るかが、実は大きな問題であったのである。現金もない、部物交換できる食糧や衣類もない、また、運送手段も持たない貧しい人々の手に渡することは不可能に近かった。結局、魚がジャガイモに代わることはできなかったのである。

〔参考文献〕

- * ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいもーポテトの文化史』(青土社,1998)
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)

(3) 1847年、「貧民救済施設」の実態

1846年ダブリンに「中央保健局」(Central Board of Health)が設立され、病院や診療所を運営した。しかし、その年に疫病が広まったときには、アイルランド全体に以前と変わることなく、28箇所の病院があるに過ぎなかった。疫病が発生してから南部から北西部、中西部へと蔓延していくにはほとんど時間がかからなかった。1846年11月、コーク州のミッチェルタウンで同年の10月には南部のウオーターフォードで、同年6月に中西部のギャリック・オン・シャノンで発生が報じられて以来、冬を迎えて翌年1847年の1月から4月にかけて、蔓延してしまったのである。

「中央保健局」は、特に「飢餓熱」とよばれていたものであるが、疫病の蔓延の速度についていけず、対応が遅れた。1847年に全国に仮設熱病収容施設をつくり、医者の巡回を始めた。交通機関が無い地方で、移動には大変な時間と労力を要した。政府から派遣された疫病実態調査官の中には、途中で疫病に感染し、命を落とした者もいた。また、薬品や医療器具が届くにも時間がかかった。予防接種も無い状況で、収容施設の奉仕活動をしていた聖職者や看護師や政治家なども疫病に感染し、多くが死んだ。

疫病は蔓延し、大勢の人々が施設に助けを求めてやって来たが、薬や医者だけでなく、患者の世話や施設の管理する人の不足によっても衛生状況は最悪になった。

1847年春、疫病に感染した人々は路上に、また小屋の中に折り重なるように死んでいった。施設には収容しきれないほどの病人であふれた。その現状は、1つのベッドに3

人も4人もが重なるように寝かされ、満足な寝具の与えられていなかった。予算は無く、世話してくれる人も無く、患者は自分の衣服は自分で洗ってそれだけを着ていなければならなかった。しかし、多くの患者は立ち上がることすら出来なかった。施設が洗濯、洗淨して衣服や寝具管理するということは不可能であった。実際、弱りきった患者はぼろを纏ったまま不潔の状態で死んでいったのである。

当時、「貧民救済施設」の収容人数は11万5000人程度であった。しかし、熱病など流行によって同施設内に仮設熱病収容施設が設けられ、各施設の収容人数をはるかに超える人数が収容されるようになった。コーク州のスキバレーンに在った800人収容の「貧民救済施設」では、1846年9月から47年9月までの1年間で、死亡者の内訳は44%が熱病で、餓死は34%、赤痢が22%であった。赤痢と熱病を合すると66%の被収容者が病死で、残りは施設内での餓死ということになる。施設内で餓死者が出るということは、当時食糧がどこにいても手に入らなかったということを物語っている。当時の政府の救済支援は、食糧に関して、こういう施設にはまったく届けられていなかったのである。施設の運営を「地方救済委員会」がすべて負担をしなければならなかったことを考えると、食糧を市場価格で購入する経済的余裕は委員会には残されていなかったのであろう。施設にいても外にいても生きる条件は同じだったのである。

病気に関しては、施設内と外とではただひとつの点で違いがあったと考えられる。施設内で死んだ場合、埋葬はやらしてもらえたが、外の場合は埋葬すらやらしてもらえなかったからである。実際、施設の外は、死体は埋葬されずに放置され、ねずみや野犬の餌になっていたということである。疫病の蔓延はそれまで続いたアイルランドの伝統的美徳、旅人や隣人への思いやり、もてなしの心といったものをも引き裂いてしまったのである。隣人同士が懐疑的になって避けあうようになってしまった。

コーク州のファーモイにあった「貧民救済施設」は設立当初800人の収容能力があった。しかし、熱病棟を持たなかったために、1847年病人も収容されるようになり、1月には全収容人数が2294人にまで膨れ上がった。その1月から3月までの間に543人の死者を出した。

このファーモイのような救済施設は全国に存在していた。1847年の4月までの救済施設での死亡率が約25%というのは、その時期の全国平均であった。なぜなら、全国の救済施設内の週間死亡数は1846年10月末が1000人中4人だったのが、1847年1月末には1000人中13人となり、4月中旬には25人になっていた。1月から3月末までの3ヶ月間、各週の死者の数を集計すると死亡率はファーモイと同じような死亡率になるからである。

1847年の春、ある博愛的なイギリス人の女性看護師がドニゴールを訪れた。彼女は飢餓の惨状を見て、「人々は痩せすぎて、とても生きていけるようには思えません。歩く骸骨です」、「死体はお腹の皮が背中にくっついており、脊髄の関節の数が数えられた」と書いた。^(註36) 飢餓に苦しむ人々はすでに病気に対抗する体力を失っているどころではなく、立ち上がることも出来なくなっていたのである。不潔な場所で身動きできない体に疫病が感染し、責め苛み、死に至らしめたのである。

ドニゴール州、メイヨー州、ウェストコーク地方、クレア州など、こうした地域の村は1846年から1847年にかけてその多くがほぼ全滅に近い状態であった。集落には人や生き物の姿はまったく消えうせ、廃墟となっていた。しかし、「貧民救済施設」には子供たちが残されている所もあった。ドニゴール州を訪れた女性看護師によると、その施設の子供たちも飢餓の洗礼を受けていた。顎の筋肉が落ち、ほとんどもものも言えない状態だった。うめくことも、泣くこともできなかった。彼らはひたすら無言のままで横たわり、空

ろになにやら見詰めているだけであった。顔は80歳の老人のように老け込み、どの顔にも毛が生えて、サルのように額がなかったということである。

1847年、「貧民救済施設」はほとんど死を待つ家と化していた。まだ健康と見える者も、重病人も一緒に入れられており、そのほとんどが葬式をきちんとしてもらえることを願って死を待っているかのようにであった。貧民救済施設の裏庭には荷車が並べられ、たいていいつも7、8人の死体が積まれてあったということであった。赤痢やチフスで病死した者、まだ死んではいないが衰弱しきって動けなくなった者が一緒に積まれている場合もあったらしい。

熱病、一般には「飢餓熱」と呼ばれていたものが、その感染の速さと高い死亡率は恐るべきものであるが、しかし、病気に対する対策のお粗末さは、それにもましてはるかに恐

1845年から1850年までの病気と死者概数				
	麻疹(Measles)	赤痢/下痢(Dysentery/Diarrhea)	熱病(Fever)	コレラ(Cholera)
1845年	約2,000(人)	約3,000(人)	約10,000(人)	——
1846年	約2,800	約9,000	約16,000	——
1847年	約5,000	約36,000	約57,000	——
1848年	約5,000	約25,000	約45,000	約2,000人
1849年	約5,000	約30,000	約39,000	約30,000
1850年	約2,000	約2,000	約22,000	約1,500

るべきものである。ベッドの数や寝具の数、衣服やその他公衆衛生上の問題はどのようになっていたのか、そうした問題が明らかにされるとき、ジャガイモ大飢饉の犠牲者が単に自然災害の犠牲者ではなく、むしろ人為的災害の犠牲者であったということが言われるようになった。すなわち政策の誤りによって引き起こされた災害であったとも考えられるのである。

上の表^(註36)は棒グラフで掲載されているものを数字に読み直して掲載した。ジャガイモ大飢饉1846-9年で飢餓による死者は約100万人といわれているが、純粋に飢えから衰弱して死んだ人の数は、正規に登録されている数で、4年間で約10万人弱とされている。死者の大半が何らかの病気と放置されたことが原因で死んだのである。

〔参考文献〕

- * Peter Foynes, *The Great Famine in Skibbereen*. (Irish Famine Commemoration Skibbereen Ltd, 2004)
- * James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002)
- * Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book)

(4) 病気の蔓延

(a) 天然痘

病気は表にあげた以外でも、天然痘(Smallpox)や猩紅熱(Scarlatina)などにもかかって死んだ。麻疹(Measles)や猩紅熱は子供が感染し、大飢饉の間、その病気による子供の死亡率が90%を超えていた。猩紅熱の死亡者は1848年まで年間2000人に満たない数であったが、1849年に約3000人に増え、1850年には4000人にまで増えた。また、肺結核(Tuberculosis)でも、1846年から5年間で約10万人が死んだ。

肺結核を含めた肺病の死亡者はジャガイモ大飢饉の被害の大きかった西部・西南部よりも東部のダブリンとその周辺の州で多く出た。飢餓から逃れて都市部へ人々が集まり、不

潔なスラム街ができて、人口密集地の中を空気感染していったと考えられる。ダブリン州やキルデア州では、1849年には1万人に対して450人という高い死亡率であった。

天然痘はウイルスによって感染するが、症状として頭痛、吐き気、高熱と発疹がある。この病気にかかるとう目になることもある。貧民から富者に至るまで階級を問わず感染するので、一般には飢餓とは無関係と考えられていた。しかし、実際アイルランドでは大飢饉のときに限り死亡者数は急増した。

その理由として考えられているのが、飢饉のときの人の流れである。貧民が食糧や仕事を求めて都市部や人の集まるところへ流れ込む。そして、ウイルスは保有者から接する人へと感染していく。1849年に多くの死者が出ているが、1000人に1人以上の死者が出たのは、メイヨー州やゴールウェイ州、ケリー州、コーク州など西部から南部にかけての飢饉の被害の大きかった地域であるが、それに加えてダブリン州、キルデア州、ミース州など東部の地域も含まれていた。ダブリンへの通り道になったキルデア州やミース州で感染者が多く出たということは独特のアイルランド人気質から理解できることでもある。

天然痘の死者の数

1835年	約6,000人
1836年	約6,500人
1837・9年	年平均約7,000人
1840年	約6,500人
1841・4年	年平均約3,000人弱
1845年	約3,100人
1846年	約3,900人
1847年	約5,000人
1848年	約6,000人
1849年	約6,500人
1850年	約5,000人

左の表^(註37)から分かるように1837-9年に大勢の人々が天然痘で死んでいる。この年はジャガイモの凶作がアイルランド全域に広がって、政府は大掛かりな救済活動を展開し、国庫助成金制度を設立した年であった。そして、1847-9年に死者が増えている。しかも、ジャガイモ飢饉の被害の大きかった西部、西南部で大勢の死者が出ている。天然痘は飢饉とは無関係のようであるが、実際には飢饉が発生した時に大勢が死んでいる。これにはそれなりの要因が考えられるのである。リーアム・ケネディ他著 *Mapping the Great Irish Famine* によると、その要因の第1に、社会的混乱があげられてい

る。大勢の飢えた人々は食糧を求めて家を離れ、食糧救援センターに集まる。天然痘は風媒、密集依存感染のため、病気が拡大する可能性はこれらのセンターで非常に高まった。第2に、天然痘が周期的に蔓延した都市のセンターでは、免疫を獲得していた者もいたであろう。種痘を受ける機会も都市では増えた。種痘センターは1800年にダブリンに開設されたが、実際に法律制定され、種痘が始まったのは1840年であった。表からも分かるようにそれ以後5年間は3000人台である。種痘はその当時強制はなかった。任意であったため、不便な西部、西南部の地域では多くの貧しい人々は種痘の網をすり抜けた。しかも、ジャガイモ大飢饉当時、子供たちはほとんどか栄養不足であった。栄養不足は、まだ救える可能性のある子供たちを悲惨にしていた。イニスキレン貧民救済施設の医者は、子供たちの食料不足と栄養不足による衰弱を考慮して、種痘を断念した。種痘で腕につけられた傷が壊疽と化し、腐って確実に死に至った子供が大勢いたからである。

(b) 飢餓熱

1847年、春から夏にかけて、さらに大きな問題に直面した。「飢餓熱」の流行である。さらに、「回帰熱」(Relapsing Fever)や「発疹チフス」(Typhus)の他に「赤痢」(Dysentery)など、いわゆる「飢餓熱」(Famine Fever)と呼ばれていた流行性の熱病に襲われた。

「飢餓熱」というのはローレンス・M・ギアリーによると^(註39)、飢餓が発生する必ず熱

病が発生していた関係からこう呼ばれたということである。さらにギアリーによると、19世紀のアイルランドでは飢饉による栄養失調と熱病が同時発生することから、医学者たちの間では飢饉と熱病には密接な因果関係があると考えられていたらしい。しかし、それには多くの疑問が投げかけられ、「飢餓熱」と称されていた熱病にも、よく似た症状ではあるが、地域や時間的な差で発症のあり方が違っていることがわかってきた。栄養失調よりも、貧困という重大な社会問題がこの熱病には深く結びついていたのである。貧困は人間の生活空間を狭くし、不潔なものを共有することを強いる。暖をとるために家族や人々は体を寄せ合う。近くに死者が出れば衣服や寝具を奪う。燃料が底をつくと腐敗したものであってもよく火を通さずに食べる。飢餓よりもむしろ貧困が疫病を感染していたともいえるのである。

アイルランド農民の貧困は、歴史を追うごとにジャガイモとの結びつきを強めていった。ブリテン島の中産階級の人々はパンと肉と乳製品を主体とした食生活を送っていた。ジャガイモは土中に実り、しかもいろんな病気にかかって腐敗した。そのため、ジャガイモは「汚い根」と称され、不潔の象徴とされ、避けられた。ジャガイモを求めて、狭い土地に群がるアイルランド農民たちはジャガイモ同様に不潔な人種の象徴的存在となってしまった。貧困と不潔はジャガイモと結び付けられ、疫病にかかっても当然の因果関係があるとみなされてしまったのである。

ジャガイモ大飢饉が拡大するにつれて、アイルランド農民の公衆衛生はさらに劣悪なものになっていった。「飢餓熱」が本格的にアイルランドに広がったのは衣食住のすべてが欠けてしまった1847年からである。

「貧民救済施設」(Workhouse)の中に「病院」(Hospital)が併設されていた。そこに熱病患者が収容されていたが、1847年になると急増し、収容しきれなくなった。それで、仮設の「熱病病棟」(Fever Hospital)がつくられ、熱病患者を別施設に収容することになった。貧民救済施設の収容者への伝染を防ごうというものであった。しかし、この施設の建設は財政難から容易に政府の認可が出なかったために実際の建設は遅れてしまった。

1848年2月、コンネマラ地方の視察官ジョン・ディーンはクリフデンの「貧民救済施設」での疫病の死亡者数は減り、環境もかなり改善されたと「中央救済委員会」に報告した。しかし、これはクリフデンがその地域の中心都市で多くの救済支援を受けることが出来ていたからであった。街道から離れた海岸沿いの村や山間部で事情がまったく違っていた。

コンネマラ地方の南部、ゴールウェイ湾に近いサウス・ランドストーンの施設からの悲惨な報告を受けたジョン・ディーンはフェラン医師を視察に派遣した。彼は次のように報告した。

かなりの数の収容者が主に熱病におかされ、赤痢にかかり、下痢をしていた。その中にすでに望みのない者も混じっていた。今回訪問して見た何件かの家族の極端に悲惨な姿を言い表すことはできません。彼らは寝巻きを身に着けておらず、下に引く藁もなく、ただぼろ布をまとい、古い毛布をかけているだけでした。汚物にまみれ、病気を産みだしたり、蔓延させやすいすべての環境がこの上なく存在しており、いくつかの場所に患者が群がり寝ている姿は見るに耐え難いものでした。「廃屋」(hulk)と呼ばれている棟には58名がいた。また別の「アザラシの集団繁殖地」(rookery)と呼ばれている棟には42名がいた。そのうち1家族を除いてどの家族も病気を患っており、半裸状態であった。いくつかの部屋には強烈な汚臭があつて私は何分もそこにとどまることはできませんでした。(註40)

フェラン医師はさらに3月にラウンドストーン診療所を訪れ、次のような惨状を見た。

家族6名が入院していたが、たった一つのベッドに4名が、他の2名が床に寝ていま

した。父親はその朝すでに埋葬されていました。母親と2人の子供がかろうじて一命を取り留めていました。この病気にかかるまで、粗末な境遇にありましたが、ちゃんとした人たちで、みんなにそれなりに尊敬もされていました。私がこの家族と会ったときはすでに極めて悲惨な状態にありましたが、私がこれまであったどの人たちよりもより多くの尊敬を集め、より大きな同情を掻き立てていました。熱病は完全に貧しくしてしまったのです。(註41)

このフェラン医師の報告は飢餓と飢餓熱の恐ろしさを人間の人格的側面から捉えていて注目に値する。診療施設のお粗末さと患者の悲惨な状況を述べるにとどまらず、飢餓と病気がいかに人間性まで奪ってしまったか、またそうなることへの恐怖が、さらにまたそうなったことへの憐れみと無念さが述べられている。アイルランド・ジャガイモ大飢饉が普遍的に現代の私たちに考えさせる重要な問題を、フェラン医師はその報告の中で間接的ではあるが提起しているのである。

熱病対策には多額のお金が使われていたにもかかわらず、診療所や病院の数は少なく、しかも、あまりに狭く、粗末なものであった。仮設の熱病病棟、アイルランド人が「熱病小屋」(Fever Sheds)と呼んだものがつくられたにすぎなかった。

ある医者はコーク州のバントリィの「貧民救済施設」を訪れて次のように報じた。

わたしが家に入ったとき、それに続く悪臭は極めて激しく、不快なものであった。病棟の廊下を歩いているうちに目に映ったものは藁の上に横たえる患者であった。彼らは裸で糞便にまみれていた。明かりは天井に一つついているだけだった。薬も飲み物も暖もなく、死者の脇に死にかかった生者が見境なく横たわっていた。(註42)

熱病の猛威は想像を絶するものであったが、結局有効的な手立ては何一つなされないまま回復だけが待たれる状況であった。病気に感染した貧民の多くが誰にも知られることなく、人目につかない場所でひっそりとこの世から消えていった。死人に気づいた健康な隣人がどこかに埋めてやれる場合はまだ良いほうで、多くが崩れた家屋の片隅や石壁の下に、山中の岩陰に家族が一同となって、あるいは単身で行き倒れとなって、死んでいった。死者に対する法的な手続きがなされようにもなす術はなかったのである。

(c) 発疹チフス

20世紀になってようやく、「飢餓熱」と称されていたものには何種類かの異なった疫病があり、さらに疫病に似た症状を引き起こす栄養失調による病があったことがあきらかになった。感染の原因や経路、さらに症状の違いが明らかになった。

一つは「発疹チフス」(Typhus)である。これは「リケッチア」(Rickettsia)という、微生物が血管に侵入して引き起こす病気である。「リケッチア」は1インチの5万分の1という小さい生物で、それを発見したのは、1910年、アメリカのリケッツ(Ricketts)という学者とされている。その後「発疹チフス」と「リケッチア」とその媒介生物「しらみ」(louse)の関係が明らかになった。この医学の成果があって、60年間不明であったアイルランド「飢餓熱」発生のメカニズムの一つが解明されたのである。

「発疹チフス」すなわち「タイファス、typhus」という呼び名は、気のふさいだ精神状態を言い表しており、18世紀の半ばにいわれるようになったに過ぎない。「発疹チフス」はアイルランドでは「黒い熱病」と呼ばれていた。その言葉はまた、よこしまな心を持った者によって呪詛として使われていた。ウィリアム・P・マッカーサーはアイルランドの1816年に流行った飢餓熱でそれに纏わる実話を次のように書いている。

ある貴婦人がいて、彼女は施しをしつこくねだる街路乞食女の言うことに耳を貸そうとしなかった。ところが、その貴婦人が立ち去ろうとしたその際に、乞食女は大声で、「黒い熱病」にかかって死ね、と呪いをかけた。それと符合するかのよう、その

貴婦人はその晩悪性の発疹チフスを患って、1週間後に死んでしまった。夫もまた同じ病気にかかり、妻の後を追って2、3日後に死んでしまった。迷信深い人々の果てしない恐怖と失望。・ ・ 1849年のある医療報告の中に、一人の医者が発疹チフスの発病は一つの深刻な精神的打撃によって引き起こされるという自己の確信を証拠付けるために、こうした一連の出来事を引き合いに出したことが書かれている。(註43)

発疹チフスは、1619年にまで遡って、アイルランドを蹂躪したクロムウェルの軍隊に感染し、「アイルランド間歇熱」(Irish Ague)と呼ばれたということであるが、実体のわからないまま、長年にわたってアイルランド特有の病気とみなされていたようである。

「しらみ」は大量発生し、それが「リケッチア」の餌食になった。「リケッチア」に汚染された「しらみ」が人を刺す。刺された人は皮膚を掻き、破れた皮膚からリケッチアは毛細血管へと侵入し、「発疹チフス」を発症させる。また、「しらみ」が人につぶされることがあっても、人の皮膚に付着してわずかな傷から体内に侵入した。さらにまた、「しらみ」の死骸や糞が乾燥して空中に舞うようになっても、その中に「リケッチア」は生き続け、人の眼の瞼や呼吸器の粘膜から体内に侵入した。「しらみ」と直接接触しなくても、人への感染は空中に舞う「リケッチア」によっても感染したのである。

「リケッチア」は血管から侵入すると、繁殖し、毛細血管を襲って詰まらせ、皮下出血を起こさせた。脳の毛細血管を襲った。狂乱状態になり、顔などの皮膚が黒ずんで、腫れあがった。吐瀉、壊疽、体に悪臭があり、高熱が出て死に至った。

(d) 回帰熱

あと一つは「回帰熱」(Relapsing fever)である。「回帰熱」という用語は1865年に「オックスフォード英語辞典」に引用されたが、アイルランドではすでに使われていた。

この熱病は「スピロヘータ」(Spirochaete)の感染によって引き起こされる。「スピロヘータ」は「リケッチア」の発見よりもずっと早く、1843年にドイツの科学者によって発見された。「リケッチア」の40倍も長い糸状の生き物である。腸では増殖せず、肢体で増殖する。したがって、「しらみ」の糞に混じって外に出ることはないが、しかし、皮膚を通して人間の血管に進入して感染することは「リケッチア」と同じである。

「スピロヘータ」が人の体内に侵入すると急激に増殖する。数時間以内で高熱が出て、嘔吐、下痢を数日繰り返す。異常に汗をかき、極端に疲労する。しかし、極限状態に達したと思える段階で、突然「スピロヘータ」の増殖はおさまリ、熱が下がる。小康状態がほぼ1週間続いた後に、「スピロヘータ」は増殖を始め、再び高熱が出る。そして、再度小康状態になり、一時してまた高熱が出る。そうした状態を何度か繰り返しながら、死に至る。「回帰熱」は黄疸が出て、皮膚が黄色くなることからアイルランドの人々はこの病気を「黄色い熱病」(Yellow Fever)と呼んだ。

(e) 壊血病

ジャガイモ大飢饉の間アイルランドの貧しい人々を苦しめた油断ならない病気はビタミン欠乏症であった。それは「壊血病」(Scurvy)と「眼乾燥症」(Xerophthalmia)であった。「壊血病」はジャガイモ大飢饉以前にはアイルランドになかった病気である。ジャガイモが不作になり、インディアンミールがジャガイモの代用食として入ってきたところから、「壊血病」は増えたとされている。しかし、増えたといっても、当時正体不明の病気であり、その病気かどうか判明できない状況であった。記録として残っているのは1841年から1851年にかけて、167人の死亡者が出たということぐらいである。

今日、栄養学的には、正常、大人で毎日300から400mgのビタミンCを摂取する必要があるとされている。30から40mg程度の摂取であれば「壊血病」にかかる危険

性が高いとされている。

毎日ジャガイモを食べて、また鯨やバターミルクを好んだアイルランド人は十分というより必要以上のビタミンCを摂取していたということになる。しかし、ジャガイモ大飢饉は突然アイルランド人からビタミンCを奪い去ってしまったのである。インディアンミールやオートミールからはビタミンCを摂取することは出来なかった。しかも、ビタミンCは毎日必要量摂取しなければならない。体内でつくられることもなければ、体内に蓄積されることもない。突然ビタミンCを含む食糧がすべて全滅したり、入手できなくなった。しかも、以前に取りすぎていた栄養は、体質を変えていたとも考えられる。ビタミンCを多くとっていたためにそれを消費しやすい体質になっていた可能性があると考えられている。普段から少量しか取れない環境にある場合はその少量に体が順応するようになるが、逆に大量に摂取している場合は体が消費しやすくなるようである。アイルランド人の場合悪条件が重なったとも考えられるのである。

「壊血病」にかかると倦怠感、呼吸困難、精神的抑圧感などが生じる。ついで、皮下出血があり、紫色の斑点が最初は肢体からついで体の各所に生じる。歯茎は赤く腫れ、海綿状になり、歯が抜け落ち、関節が腫れて激しく痛む。皮下出血が足に起き、黒くなる。痙攣や激痛が全身を襲い、皮膚が黒く変色し、やがて脳がおかされ、心筋停止を起こす。特に足が腫れて黒くなることから、アイルランドではこの病気を「黒足」(black leg)と呼んでいた。

この恐ろしい病気がジャガイモの不作と密接な関係があるということを当時の医者も多くは知らなかったらしい。多くの医者は、腐ったジャガイモを食べたためにかかったと考えていたらしい。しかし、医学者の中にはアイルランド人の食生活の変化に注目し、ジャガイモとの関連をつきとめた人がいた。そこから、「壊血病」は、アイルランド独特の生活事情とジャガイモの飢饉に深い関係のある病気として考えられるようになったのである。

(f) 赤痢

ジャガイモ大飢饉の間、下痢で多くの死亡者が出た。これはキャベツの葉や蕪や海草やインディアンミールを生で、汚れたまま食べることによって下痢をし、下痢が慢性化し、体力を失って大勢が死に至った。当時ははっきり区別できなかったらしいが、下痢に「桿菌性の赤痢」(Bacillary Dysentery)があった。桿菌に感染した食糧を人が食べると、桿菌は胃腸で増殖する。激しい腹痛と下痢を伴って、腸に炎症を起こし、潰瘍をつくり、最後には壊疽を起こし死に至らしめる。エニスの「熱病収容施設」で重症の赤痢患者が大勢収容された。施設内には猛烈な腹痛に苦しむ患者のうめき声に満ちていたということである。患者は血便に苦しみ、床を血の塊で汚し続けた。

(g) コレラ

1848年アジア型コレラ(Asiatic Cholera)の感染者がエジンバラからベルファストにやって来て、病院で死亡した。その感染者は病院に入る前に「貧民救済施設」に入っていて、コレラの感染がそこからアイルランド全体に広がった。翌年の5月にピークにしておさまった。コレラの犠牲者には長引く飢餓と疫病のため、施設がまったく対応できず、ほとんど餓死状態だったらしい。結局このコレラの犠牲者の数は3万6000人であった。

貧しい若者たちは次第に疫病に対する自然免疫ができてきたらしいが、都市などにすむ免疫の無い医者や医療関係者、さらには司祭、僧侶、救済委員、役人たちは疫病にかかって次々と死んでいった。特に、地方の救済委員は貧しい農民の命を救うために政府や中央保健局への手紙や請願書に迫られたが、彼らの体力は食糧不足と過労のために限界に達し、疫病に感染して命を失うということもあった。また、カトリックの司祭たちの中には、自

らの体力を顧みず、死の床に苦しむ人々に秘跡を与えるために病人の元にも出向き、そこで感染して亡くなった人もいた。

コレラが流行した時期は海外へ移民が多くなったときであった。アメリカ大陸へ向かう帆船の中に詰め込まれた船室にコレラが蔓延したことがあった。カナダの港から生き残ったアイルランド人が上陸し、病院に送られた。保菌状態でカナダまで行き、それまではコレラ感染者は皆無であった地域にコレラが蔓延するという事件がおこったということである。

〔参考文献〕

- * Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)
- * Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)
- * Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)
- * Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book)
- * Cathal Poirteir, *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)

終わりに

この世に失望した貧しい農民や農業労働者は、ただ闇の中を死へと向かって歩むだけであった。彼らは死者の群れの中、見渡す限り死だけが在るアイルランドの大地を見つづけてやがて自分も死者の群れに加わった。そこにはこの世に希望と呼べるものは何一つ存在しなかった。飢餓と熱病の苦しみから救ってくれるものは他ならぬ死だけであった。

特に子供は悲惨であった。当時のアイルランドの子供たちは何のためにこの世に生を受けたのであろうか。見るも無残な姿をさらすために生まれたのであろうか。飢え死にするために、あるいは〈飢餓熱〉で狂い死にするために生まれてきたのであろうか。

たとえ病死であったとしても、こうした死は不自然な死であり、1個の人間の生の尊厳を計り知れないほど陵辱するものである。100万人という膨大な数の死が意味するものは、単に数量の問題ではなく、1個の非人間的な、陵辱された死が100万あったということでもある。あくまでも1個の無残な〈死〉が100万様存在したということなのである。

また、このアイルランドの大飢餓の悲惨さをアイルランドという特別な地域と歴史が生み出した固有の問題であったということにとどめることはできない。なぜなら、当時文明の最先端を進んでいたイギリスのすぐ隣に位置し、しかも連合王国であったアイルランドに、一種類の食糧に過ぎないジャガイモが腐ったということだけで100万人もの餓死者が出たからである。ジャガイモ以外の食糧はアイルランド国内では普段と変わらない量が生産され、1847年には穀物は世界的に豊作で価格も下がっていた。しかし、貧しい飢えた人々のもとにはまったく届かなかったのである。ある所には食糧が豊富にあり、飢餓を餌に大きな利益をあげている者もいた。こうしたことを考えると、アイルランド大飢餓が、いわゆる飢饉から生じた避けがたい自然災害ではあったのではなく、人間の悪意と偏見が生み出した人為的災害であったといえるのである。

註

- (1) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)のp.8から引用。
- (2) この用語は山川出版社の『イギリス史』より使用。
- (3) Dudley Edwards(ed.) *The Great Famine, Studies in Irish History 1845-52*. (Lilliput, 1994)とCecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book)の本文の中に記述されていた数字を照合して表を作成した。

- (4) Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999) のp.39のマップから数字に読み替えて表を作成した。
- (5) リチャード・キレン著、鈴木良平訳『図説アイルランドの歴史』(彩流社)の16章に詳しい記述がある。
- (6) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. (Wolfhound, 1994)のp.8から引用。
- (7) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)のp.181にはスパルピーンについての記述がある。
- (8) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book)
- (9) Christine Kineary, *The Role of the Poor Law during the Famine*.はCathal Poirteir(ed.), *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995)に収められている。
- (10) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)、p.194
- (11) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)、p.190
- (12) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989)
- (13) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)、p.190
- (14) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989), p.39
- (15) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.79
- (16) Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)のpp.98-9のマップから数字に読み替えて表を作成した。
- (17) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.79
- (18) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.80
- (19) テリー・イーグルトン著、鈴木聡訳『表象としてのアイルランド』(紀伊國屋書店)、p.38
- (20) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.83
- (21) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)、p.191
- (22) Peter Foynes, *The Great Famine in Skibbereen*. (Irish Famine Commemoration Skibbereen Ltd, 2004), p.50
- (23) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.87
- (24) James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002), p.77
- (25) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.90
- (26) James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002), p.58に掲載されている〔折れ線グラフ〕を数字に読み替えて表を作成した。
- (27) James S. Donnelly, JR, *The Great Irish Potato Famine*. (Sutton Publishing, 2002), p.61
- (28) Peter Foynes, *The Great Famine in Skibbereen*. (Irish Famine Commemoration Skibbereen Ltd, 2004), pp.51-2
- (29) Peter Foynes, *The Great Famine in Skibbereen*. (Irish Famine Commemoration Skibbereen Ltd, 2004), p.47
- (30) Robert Kee, *Ireland, a history*. (Abacus, 1991), p.85
- (31) Kathleen Villiers-Tuthill, *Patient Endurance, The Great Famine in Connemara*.(Connemara Girl Publications, 1977), p.54
- (32) Kathleen Villiers-Tuthill, *Patient Endurance, The Great Famine in Connemara*.(Connemara Girl Publications, 1977), p.55
- (33) Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999)、p.130のマップから数字に読み替えて表を作成した。
- (34) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)、p.257-8
- (35) ラリー・ザッカーマン、関口篤訳『世界を救ったじゃがいも—ポテトの文化史』(青土社,1998)、p.256
- (36) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book), pp.195

- (37) Kathleen Villiers-Tuthill, Patient Endurance, *The Great Famine in Connemara*. (Connemara Girl Publications, 1977), p.60に掲載の〔棒グラフ〕の一部を数字に置き換えて、表を作成した。
- (38) Kennedy, Ell, Crawford & Clarkson, *Mapping the Great Irish Famine*. (Four Courts, 1999), p.121のマップから数字に読み替えて表を作成した。
- (39) Laurence M. Geary, Famine, Fever and the Bloody Flux.はCathal Poirteir(ed.), *The Great Irish Famine* (Mercier Press, 1995), pp.86-103に収められている。
- (40) Kathleen Villiers-Tuthill, Patient Endurance, *The Great Famine in Connemara*. (Connemara Girl Publications, 1977), pp.88-9
- (41) Kathleen Villiers-Tuthill, Patient Endurance, *The Great Famine in Connemara*. (Connemara Girl Publications, 1977), p.89
- (42) Robert Kee, Ireland, a history. (Abacus, 1991), p.91
- (43) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. (Old Town Book, 1989), pp.190-1